
日本ロシア文学会
第64回大会資料集

2014年11月1日(土)～2日(日)
山形大学(小白川キャンパス)

日本ロシア文学会

第64回(2014年度)定例総会・研究発表会は、来たる11月1日(土)、2日(日)の両日、山形大学(小白川キャンパス)で開催されます。

研究発表会では、12ブロック38件の個別発表のほか、ワークショップとコロキウムが1つずつ行われます。ふるってご参加ください。

以下、日程をご確認の上、同封のはがきで出欠のご予定を10月14日(火)までにお知らせいただくようお願いいたします。

11月1日(土)							
開会式 09:30-09:45 基盤教育2号館222教室							
		第1会場 基盤教育2号館 1階211		第2会場 基盤教育2号館 1階212		第3会場 基盤教育2号館 1階213	
研究発表	09:55-10:30	A1-1	A1 ブロック	B1-1	B1 ブロック	C1-1	C1 ブロック
	10:30-11:05	A1-2		B1-2		C1-2	
	11:05-11:40	A1-3		B1-3		C1-3	
昼食・理事会	11:40-12:40	理事会 基盤教育2号館222					
研究発表	12:40-13:15	A2-1	A2 ブロック	G2-1	C2 ブロック	C3-1	C3 ブロック
	13:15-13:50	A2-2		G2-2		C3-2	
	13:50-14:25	A2-3		G2-3		C3-3	
	14:25-15:00			G2-4		C3-4	
大賞受賞記念講演	15:15-16:15	基盤教育2号館222教室					
定例総会	16:30-18:00	基盤教育2号館222教室					
懇親会	18:45-20:45	山形国際ホテル6階スプレnderの間					

11月2日(日)							
		第1会場 基盤教育2号館 1階211		第2会場 基盤教育2号館 1階212		第3会場 基盤教育2号館 1階213	
研究発表	09:00-09:35	A3-1	A3 ブロック	B2-1	B2 ブロック	C4-1	C4 ブロック
	09:35-10:10	A3-2		B2-2		C4-2	
	10:10-10:45	A3-3		B2-3		C4-3	
	10:55-11:30	A4-1	A4 ブロック	A5-1	A5 ブロック	C5-1	C5 ブロック
	11:30-12:05	A4-2		A5-2		C5-2	
	12:05-12:40	A4-3		A5-3		C5-3	
昼食・各種委員会	12:40-13:30	ロシア語教育委員会(2階222), 編集委員会(人文学部1階12演習室) 広報委員会(人文学部1階13演習室)					
ワークショップ・コロキウム	13:30-15:00	ワークショップ			コロキウム		
シンポジウム	15:15-17:15	基盤教育2号館222教室					

会場案内

〈受付〉基盤教育2号館玄関

〈控室〉2階221

〈書籍等販売〉1階214

シンポジウム

アンドレイ・タルコフスキー、映画／文学を越えて

Symposium

«Andrei Tarkovsky: Beyond the Boundaries between Cinema and Literature»

日時：11月2日（日）15時15分～17時15分

場所：山形大学（小白川キャンパス）基盤教育2号館2階 222番教室

アンドレイ・タルコフスキーは、たんに映像作家であるのみならず、映画はもちろん、文学や美術にも造詣が深く、読み応えのある文章を多く書き残している。それらの中で語られているように、彼にとって映画というメディアの特性は「直接的に時間を刻印できること」にあるわけだが、このことは、「芸術」が表現すべきなのは「現実」であり、「真実」であり、「生」であるという彼の芸術観・理念と深く結びついているといえよう。

ところで、この「現実」や「真実」、「生」という彼の言葉遣いが「リアリズム」という漠とした理念を呼び起こし、その結果、われわれがロシア文学という伝統を想起してしまうとしても、決して付会ではないはずだ。映像作家であるタルコフスキーの映画＝芸術に対する姿勢は、そうした（ロシア）文学の伝統を継承・発展したものと捉えることができるのではないか。このシンポジウムでは、タルコフスキー作品に造詣の深い2名の文学研究者を招き、敢えて「（ロシア）文学の伝統」というフィルターを通してタルコフスキーの作品論を展開してもらうことで、その新たな魅力の一側面に光をあてたい。

一方で、そうした「ロシア文学の伝統」とは無関係に存在する「映画史」という流れの中では、映像作家タルコフスキーはいったいどのように位置づけることができるだろうか。この観点から2名の映画研究者を招き、映画としてのタルコフスキー作品の特異性、あるいは彼が映画史の中で新たに切り開いた地平について語ってもらう。

タルコフスキーは何を「文学」から継承し、その「映画」作品は映画というジャンルの中でどのように生きているのか。4名の報告を経たのち、コメンテーターと聴衆を交えた全体討議を通して、映画／文学という境界を仮構しながらもそれを越えていくような、総合的で多面的なタルコフスキー像が呈示されることになるだろう。

司会：八木君人（Naoto YAGI）

コメンテーター：大平陽一（Yoichi OHIRA）

報告者：

坂庭淳史：タルコフスキーの「父」

Atushi SAKANIWA: “Tarkovsky’s “Father”.”

アンドレイ・タルコフスキーの映画『鏡』や『ストーカー』、『ノスタルジア』では、彼の父アルセーニー・タルコフスキーの詩が引用され、『鏡』ではアルセーニー自身が詩を朗読している。アンドレイの創作の世界を理解する上で、アルセーニーの存在、アルセーニーの詩を看過することはできないだろう。今回の報告では、アンドレイがアルセーニーから受け継いだもの、あるいはアンドレイの映画における「父」の形象について考えてみたい。

斉藤毅：タルコフスキーの映画における〈言葉〉の問題について

Takeshi SAITO: "Some Motifs Related to Language and Speech in Tarkovsky's Films."

タルコフスキーはロシアの文学的伝統の流れをも汲む映画作家であると言えることができるが、彼と文学との関わりについては、もっとその本質にまで踏み込んで考えてみる必要があるように思われる。彼の映画では、「いかにして言葉（発語、語り、対話）は可能か」ということが、つねに重要なテーマとして扱われており、映像を通して言葉の条件を問うことが、彼の創作の一つの動機であったと仮定することもできる。この問題について、とくに『ノスタルジア』と『鏡』を例にして考えてみたい。

井上徹：タルコフスキーとソビエト映画における「詩的映画」

Toru INOUE: "Andrei Tarkovsky and lines of 'poetic cinema' in Soviet films."

タルコフスキーの映画は、しばしば「映像詩」と呼ばれてきた。監督自身も、その映像論において「詩」に特別な地位を与えている。一方、ソビエト映画には「詩的映画」の流れがあり、ドヴジェンコをはじめ重要な映画作家が生まれてきた。タルコフスキーも、その流れに連なる作家だといえるが、彼が創ろうとした「映像詩」とは、そもそも何だったのだろうか。ソビエト映画の作家としてのタルコフスキーについて、今一度考えてみたい。

畠山宗明：音、発話、時間 ―映画史の中のタルコフスキー

Muneaki HATAKEYAMA: "Sound, utterance, and time --Tarkovsky in Film history."

タルコフスキーの映画は、宗教性や文学性、芸術性によって語られることが多い。しかし、タルコフスキーが表現の手段として選んだのが、映画という20世紀に隆盛を極めたメディアだったということも、忘れてはならない事実である。例えばタルコフスキーは「時間」を自らの表現の核心に位置づけたが、時間表象は、環境音による持続の表現などトーキー以降に多様化したものである。つまり、タルコフスキーの時間表現は、発話も含めた音声使用と密接な関係を持っていると考えることも可能である。本発表では、タルコフスキーの音声使用や発話の演出を映画史的な視点から位置づけることで、彼の作品や方法論を新しく考え直すための視座を模索してみたい。

第1日研究発表 11月1日(土) 基盤教育2号館1階

第1会場 1階211				
ブロック・日時	番号	発表者	題目	司会者
A1ブロック 11月1日 09:55-11:40	A1-1	野中 進	アンドレイ・プラトノフの創造的進化における抒情性と反抒情性の相克(『かつて愛し合った者たち』他)	西中村浩 武田昭文
	A1-2	古宮路子	キュビズム小説としての Ю. К. Оレーシャ 『羨望』	
	A1-3	ГРЕЧКО Валерий	Литературный примитивизм: формы и пути развития	
A2ブロック 11月1日 12:40-14:25	A2-1	山下大吾	プーシキンの二つの「旅」: 比較研究の試み	乗松亨平 松本賢信
	A2-2	高橋知之	プレシチエーフと人格の探求	
	A2-3	泊野竜一	『長広舌と沈黙との対話』の展開	
第2会場 1階212				
ブロック・日時	番号	発表者	題目	
B1ブロック 11月1日 09:55-11:40	B1-1	世利彰規	感情・評価表現に見られるニコライ・ゴゴリの精神状態の変化	佐藤昭裕 野町素己
	B1-2	恩田義徳	古代教会スラブ語の分詞の統語的用法上の差異と短・長語尾形の関係について	
	B1-3	西原周子	ロシア語かセルビア語か、それとも他の言語か? ザハリヤ・オルフェリン(1726-1785)の詩作品の言語的特徴について	
C2ブロック 11月1日 12:40-15:00	C2-1	本田晃子	地下鉄言説を超えて—ゲオルギー・ダネリヤ『モスクワを歩く』と『ナースチャ』に見る地下鉄空間	越野剛 中澤敦夫
	C2-2	前田しほ	後期ソヴィエトにおける独ソ戦記念碑の表象と機能	
	C2-3	鈴木佑也	国家建築様式からの逸脱または跳躍: 建築競技設計後におけるソヴィエト宮殿の「アメリカ化」	
	C2-4	宮崎衣澄	日本ハリストス正教会東京復活大聖堂(ニコライ堂)の旧イコノスタシス研究	
第3会場 1階213				
C1ブロック 11月1日 09:55-11:40	C1-1	長井 淳	アレクセイ・ゲルマン『わが友イヴァン・ラプシン』と『フルスタリョフ, 車を!』におけるドラマトウルギーと歴史認識	八木君人 佐藤千登勢
	C1-2	扇 千恵	アンドレイ・タルコフスキイ監督の作品分析と『映画解釈学』	
	C1-3	梶山祐治	幸せな「私」を求めて—アレクセイ・バラバーノフの映画における創作のテーマ	
C3ブロック 11月1日 12:40-15:00	C3-1	三浦領哉	В.Ф.Одоевский の音楽美学—19世紀前半のロシアにおける西欧芸術音楽の受容をめぐって	木村崇 高橋健一郎
	C3-2	伊藤 愉	メイエルホリド演劇における音楽性と研究工房	
	C3-3	楯岡求美	レールモントフ『仮面舞踏会』における女性表象と映像化・舞台化の問題	
	C3-4	ЖДАНОВ Владимир, 鈴木淳一	Лермонтов в «интеллектуальном обиходе» русских мыслителей (к 200-летию со дня рождения)	

第1回日本ロシア文学会大賞受賞記念講演

11月1日(日) 15:15-16:15 基盤教育2号館2階222番教室

井桁貞義氏 世界を目指した日本のロシア文学研究 — 研究者の喜びと使命について—	※本講演は東京の井桁氏書齋と山形大学の会場をスカイプでつないで行われます。
--	---------------------------------------

第2日研究発表・ワークショップ・コロキウム 11月2日(日) 基盤教育2号館1階・2階

第1会場 1階211				
ブロック・日時	番号	発表者	題 目	司会者
A3ブロック 11月2日 9:00-10:45	A3-1	竹内ナターシャ	ソログープ『光と影』における演劇的存在としての「子供」について —エヴレイノフとの比較から—	望月 恒子 貝澤 哉
	A3-2	林 由貴	愛着と盗難 —ブーニン『乾きの谷』についての考察	
	A3-3	東 和穂	解説される世界 —危機の時代のアンドレイ・ペールイー	
A4ブロック 11月2日 10:55-12:40	A4-1	樋口 稲子	ユートピアからアンチユートピアへ：ドストエフスキーとザミャーチン	長谷川 章 村田 真一
	A4-2	秋月 準也	M・ブルガーコフ文学における「家表象」の変化	
	A4-3	石原 公道	M・ブルガーコフの最初の妻ラッパー	
ワークショップ 11月2日 13:30-15:00	W	ワークショップ トルストイ研究の新しい局面 木村 崇, 望月 哲男, Александр АЛЕКСАНДРОВ, 中村 唯史		
第2会場 1階212				
ブロック・日時	番号	発表者	題 目	司会者
B2ブロック 11月2日 9:00-10:45	B2-1	井上幸義	ロシア語の造格の不変の意味について	堤 正典 秋山 真一
	B2-2	光井明日香	ロシア語における名詞の性の分類について	
	B2-3	鈴木理奈	数量表現における構成要素の分類	
A5ブロック 11月2日 10:55-12:40	A5-1	関 岳彦	ヨシフ・プロツキーと牧歌	沼野 恭子 岩本 和久
	A5-2	中野幸男	ディアスポラ文学としてのロシア・トランスナショナル文学	
	A5-3	坂中紀夫	ロマン・キムのスパイ探偵小説におけるアイロニーの問題	
第3会場 1階213				
ブロック・日時	番号	発表者	題 目	司会者
C4ブロック 11月2日 9:00-10:45	C4-1	佐藤貴之	スキタイ主義に見られる「スチヒーヤ」の象徴について	北見 諭 中村 唯史
	C4-2	北井聡子	レーニンなき共産主義へ	
	C4-3	赤尾光春	東部戦線とユダヤ人 —S・アンスキー『ガリツィアの破壊』(1920年)に描かれたロシア・ユダヤ関係の両義性	
C5ブロック 11月2日 10:55-12:40	C5-1	平野恵美子	バレエ《魔法の鏡》と1900年代ロシア帝室劇場における変化	草野 慶子 相沢 直樹
	C5-2	斎藤慶子	日本人によるソ連バレエ受容初期の動き —ソ連文化省資料をもとに	
	C5-3	村山久美子	M・プティパからM・フォーキンのバレエの変貌, そのバレエ史上の意義 —作品構造, 使用空間, 技術的側面の分析を中心に—	

第3会場 (続き)

コロキウム 11月2日 13:30-15:00	Q	<コロキウム — 報告と討論> 全国6言語アンケート調査結果(最終報告)とロシア語教育の方向性 佐山豪太, 宮本友介, 横井幸子, 林田理恵
-------------------------------	---	--

シンポジウム 11月2日(日) 15:15-17:15 基盤教育2号館2階222番教室

アンドレイ・タルコフスキー, 映画/文学を越えて	司会: 八木君人 コメンテーター: 大平陽一 報告者: 坂庭淳史, 斉藤毅, 井上徹, 畠山宗明
--------------------------	--

会場校からのお知らせ

【宿泊・昼食その他】

・宿泊施設の斡旋はいたしません。各自でご手配ください。会場周辺に宿泊施設はありません。会場近くまでの路線バスが出る JR 山形駅周辺か、徒歩でも会場へのアクセスが可能(15~20分程度)な七日町界隈の宿泊施設をお勧めします。

(ホテルの例)

山形駅東口周辺: ホテルメトロポリタン山形, 山形国際ホテル, ホテルサンルート山形など

七日町から十日町: 山形七日町ワシントンホテル, 山形グランドホテル, ホテルα-1山形, キャッスルホテルなど

・昼食の手配はいたしません。土曜日のみ学内のカフェテリア(11:30~13:30)とコンビニ(10:00~14:00)が営業していますが、小規模です。また会場周辺には若干の飲食店がありますが、土日は休業する店が多いと予想されます。昼食は、宿泊施設か会場周辺のコンビニやスーパーでのご購入をお勧めします。

・お車でのご来場はご遠慮ください。

【大会実行委員会へのお問い合わせ】

山形大学人文学部

〒990-8560 山形市小白川町1-4-12

(相沢直樹研究室)

電話 023-628-4810 E-mail: aizawa@human.kj.yamagata-u.ac.jp

(中村唯史研究室)

電話 023-628-4811 E-mail: tadashi@human.kj.yamagata-u.ac.jp

【アクセス・マップ】



【会場校までの交通機関等】

・土日は公共機関の便がよくありませんので、ご注意ください。

《JR 山形駅周辺から》

- 1) JR 山形駅東口バスターミナル (4 番乗り場) から「山形県庁」行きバス (1 時間に 1 本程度) で「南高前・山大入口」下車。駅からの所要時間約 10 分。下車後、会場まで徒歩約 7 分。
- 2) JR 山形駅東口バスターミナル (5 番乗り場) から「宝沢・関沢」行きバス (1 時間に 1 本程度) で「小白川一丁目」下車。駅からの所要時間約 15 分。下車後、会場まで徒歩約 5 分。
- 3) タクシーは駅・ホテル等の周辺で乗ることができます。つかまらない場合は山交ハイヤー (023-681-1515) 等の呼び出し可能です。駅から会場までの料金は、交通事情にもよりますが、1000 円程度です。
- 4) 徒歩の場合は、駅から会場まで 30 分前後を見込んでください。

《七日町界隈から》

- 1) タクシーはホテル等の周辺で乗ることができます。つかまらない場合は山交ハイヤー (023-681-1515) 等で呼び出し可能です。会場までの料金は、交通事情にもよりますが、700 円程度です。
- 2) 徒歩の場合は、会場まで 15 分～20 分を見込んでください。

《仙台市から》

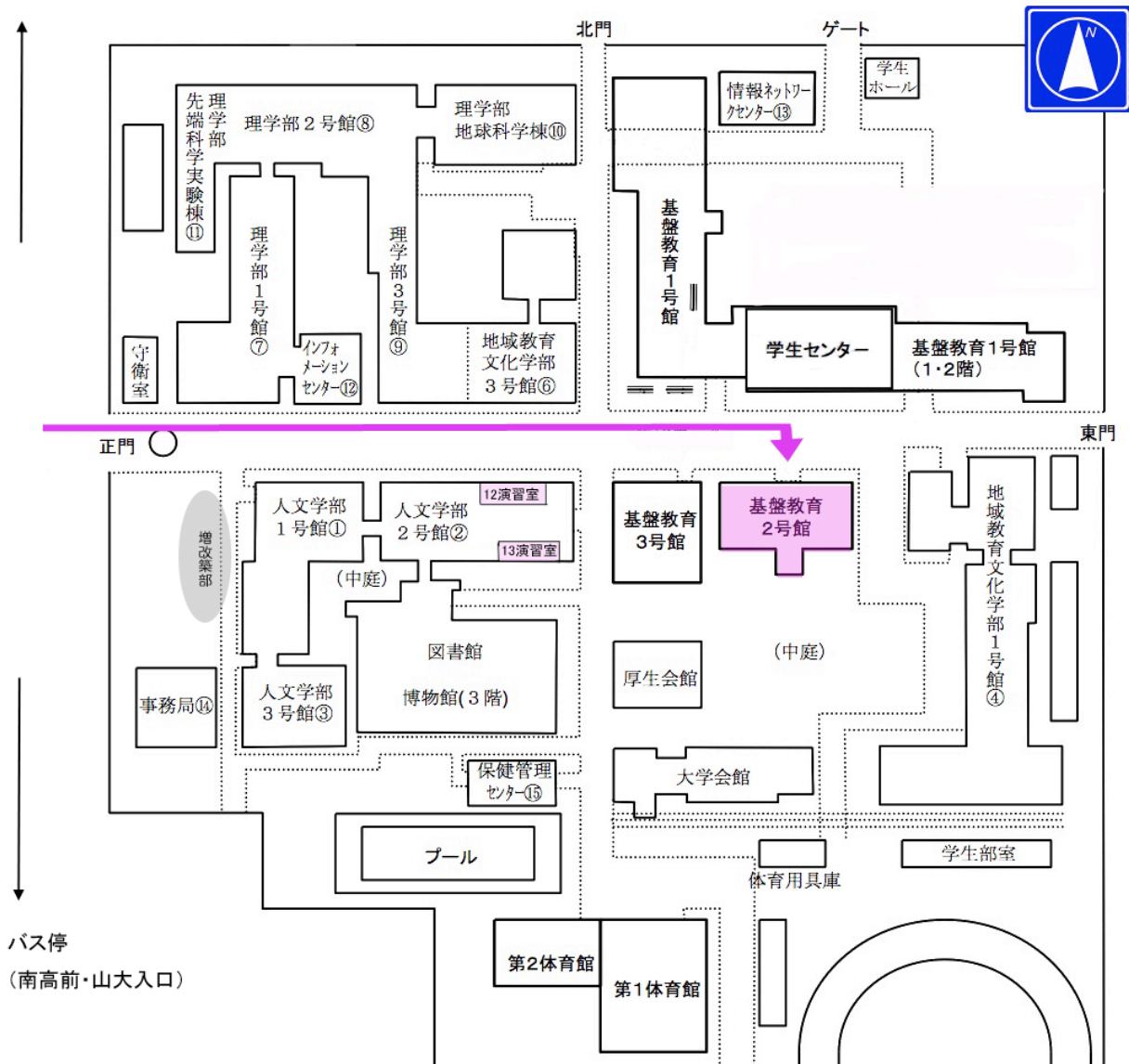
山形市と仙台市の間には、都市間高速バスが 10～20 分間隔で運行されています (「南高前」下車・仙台駅前からの所要時間は約 1 時間。料金は片道 930 円。下車後、会場まで徒歩 7 分程度)。始発は 6 時台、終発は 21 時台です。

* 山形市内の路線バス、および山形-仙台都市間高速バスの時刻表については、山交バス株式会社のホームページ (<http://www.yamakobus.co.jp>) でご確認ください。

山形大学小白川キャンパスマップ

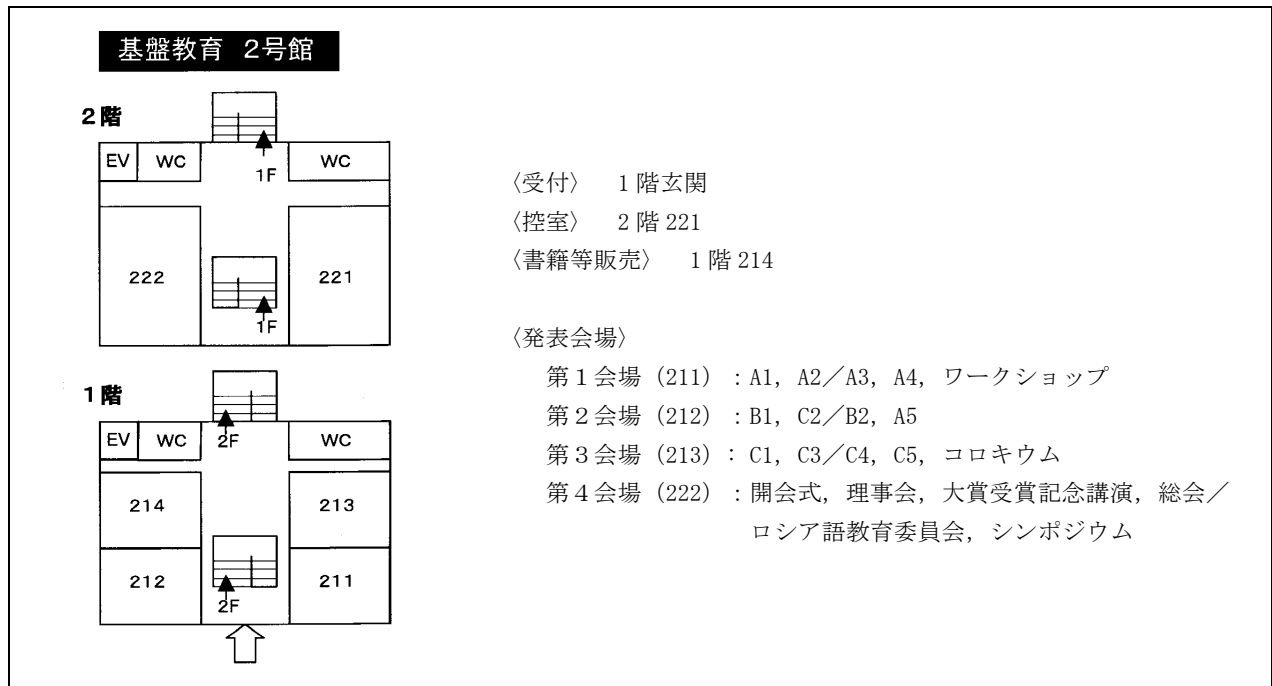
バス停

(小白川1丁目)



*正門からお入りになり、まっすぐ奥に向かってお進みください。

【会場のご案内】



人文学部 2号館 (8頁の地図をご覧ください)	人文学部 2号館 1階 12 演習室 (編集委員会) 人文学部 2号館 1階 13 演習室 (広報委員会)
----------------------------	--

懇親会のご案内

日時 : 11月1日(土) 18時45分~20時45分

場所 : 山形国際ホテル 6階スプレnderの間
 (山形市香澄町3-4-5 023-633-1313)

会費 : 常勤職にある会員 (有給の任期職にある方を含む) 8,000円
 常勤職にない会員 4,000円
 大学院生 3,000円

※大会会場からホテルまでバスが出ます (出発時刻は当日アナウンスします)。

日本ロシア文学会第64回研究発表会

報告要旨（予稿）集

A1-1	野中 進	アンドレイ・プラトノフの創造的進化における抒情性と反抒情性の相克（『かつて愛し合った者たち』他）
A1-2	古宮路子	キュビズム小説としての IO. K. オレーシャ『羨望』
A1-3	グレチコ・ヴァレリー	文学的プリミティヴィズム：形式と発展
A2-1	山下大吾	プーシキンの二つの「旅」：比較研究の試み
A2-2	高橋知之	プレシチュエーフと人格の探求
A2-3	泊野竜一	『長広舌と沈黙との対話』の展開
A3-1	竹内ナターシャ	ソログープ『光と影』における演劇的存在としての「子供」について ―エヴレイノフとの比較から―
A3-2	林 由貴	愛着と盗難 ―ブーニン『乾きの谷』についての考察
A3-3	東 和穂	解説される世界 ―危機の時代のアンドレイ・ベールイー
A4-1	樋口稲子	ユートピアからアンチユートピアへ：ドストエフスキーとザミャーチン
A4-2	秋月準也	M・ブルガーコフ文学における「家表象」の変化
A4-3	石原公道	M・ブルガーコフの最初の妻ラッパー
A5-1	関 岳彦	ヨシフ・プロツキーと牧歌
A5-2	中野幸男	ディアスポラ文学としてのロシア・トランスナショナル文学
A5-3	坂中紀夫	ロマン・キムのスパイ探偵小説におけるアイロニーの問題
B1-1	世利彰規	感情・評価表現に見られるニコライ・ゴゴリの精神状態の変化
B1-2	恩田義徳	古代教会スラブ語の分詞の統語的用法上の差異と短・長語尾形の関係について
B1-3	西原周子	ロシア語かセルビア語か、それとも他の言語か？ ザハリヤ・オルフェリン（1726-1785）の詩作品の言語的特徴について
B2-1	井上幸義	ロシア語の造格の不変の意味について
B2-2	光井明日香	ロシア語における名詞の性の分類について
B2-3	鈴木理奈	数量表現における構成要素の分類
C1-1	長井 淳	アレクセイ・ゲルマン『わが友イヴァン・ラブシン』と『フルスタリョフ、車を！』におけるドラマトゥルギーと歴史認識
C1-2	扇 千恵	アンドレイ・タルコフスキ監督の作品分析と『映画解釈学』
C1-3	梶山祐治	幸せな「私」を求めて ―アレクセイ・バラパーノフの映画における創作のテーマ
C2-1	本田晃子	地下鉄言説を超えて ―ゲオルギー・ダネリヤ『モスクワを歩く』と『ナースチャ』に見る地下鉄空間
C2-2	前田しほ	後期ソヴィエトにおける独ソ戦記念碑の表象と機能
C2-3	鈴木佑也	国家建築様式からの逸脱または跳躍：建築競技設計後におけるソヴィエト宮殿の「アメリカ化」
C2-4	宮崎衣澄	日本ハリストス正教会東京復活大聖堂（ニコライ堂）の旧イコノスタシス研究
C3-1	三浦領哉	B.Ф.Одоевский の音楽美学 ―19世紀前半のロシアにおける西欧芸術音楽の受容をめぐって
C3-2	伊藤 愉	メイエルホリド演劇における音楽性と研究工房
C3-3	楯岡求美	レールモントフ『仮面舞踏会』における女性表象と映像化・舞台化の問題
C3-4	ジダーノフ・ヴラデーミル、鈴木淳一	ロシア思想における知的常識としてのレールモントフ（生誕200周年に寄せて）
C4-1	佐藤貴之	スキタイ主義に見られる「スチヒーヤ」の象徴について
C4-2	北井聡子	レーニンなき共産主義へ
C4-3	赤尾光春	東部戦線とユダヤ人 ―S・アンスキー『ガリツィアの破壊』（1920年）に描かれたロシア・ユダヤ関係の両義性
C5-1	平野恵美子	バレエ《魔法の鏡》と1900年代ロシア帝室劇場における変化
C5-2	斎藤慶子	日本人によるソ連バレエ受容初期の動き ―ソ連文化省資料をもとに
C5-3	村山久美子	M・プティパからM・フォーキンのバレエの変貌、そのバレエ史上の意義 ―作品構造、使用空間、技術的側面の分析を中心に―

-
- W ワークショップ トルストイ研究の新しい局面
(木村崇, 望月哲男, アレクサンドル・アレクサンドロフ, 中村唯史)
- Q <コロキウム ― 報告と討論> 全国6言語アンケート調査結果(最終報告)とロシア語教育の方向性
(佐山豪太, 宮本友介, 横井幸子, 林田理恵)
-

日本ロシア文学会

2014年9月

**Abstracts of Research Papers Accepted for Presentation at the 64th Annual Assembly
of the Japan Association for the Study of Russian Language and Literature**

A1-1 Susumu NONAKA	The Confrontation between Lyricism and Anti-lyricism in the Literary Evolution of Andrei Platonov (“Those Who Once Loved” and others)
A1-2 Митико КОМИЯ	«Зависть» Ю. К. Олеси как кубистский роман
A1-3 Валерий ГРЕЧКО	Литературный примитивизм: формы и пути развития
A2-1 Даиго ЯМАСИТА	Два «Путешествия» Пушкина: предварительное сравнительное исследование
A2-2 Томоюки ТАКАХАСИ	Плещеев и поиски личностей
A2-3 Рёити ТОМАРИНО	Развитие «Диалога между тирадой и безмолвием»
A3-1 Наташа ТАКЭУТИ	О «детях» как театральном явлении в рассказе «Свет и тени» Сологуба – по сравнению со взглядами Н. Евреинова –
A3-2 Юки ХАЯСИ	Символика привязанности и кражи в повести И.А. Бунина «Суходол»
A3-3 Кадзухо ХИГАСИ	Дешифруемый мир—Андрей Белый в эпоху кризисов—
A4-1 Инэко ХИГУТИ	От утопии к антиутопии: Ф.М.Достоевский и Е.И. Замятин
A4-2 Юуя АКIZUKI	The change of symbols of house in Mikhail Bulgakov’s literature
A4-3 Кимимити ИСИХАРА	Первая жена М. Булгакова Лаппа
A5-1 Takehiko SEKI	Joseph Brodsky and his eclogues
A5-2 Юкио НАКАНО	Русская транснациональная литература как литература диаспоры
A5-3 Норико САКАНАКА	Проблема иронии в шпионском детективе Р.Н. Кима
B1-1 Акинори СЭРИ	Перемены душевных состояний Н. В. Гоголя и их проявление в употреблении эмоционально-оценочных выражений
B1-2 Yoshinori ONDA	The short and long-forms of the participles and their syntactic usages in OCS
B1-3 Shuko NISHIHARA	Linguistic Features in poems by Zaharija Orfelin (1726-1785): Were they written in Russian, Serbian, or some other language?
B2-1 Юкиёси ИНОУЭ	Инвариантные значения творительного падежа в русском языке
B2-2 Asuka MITSUI	Gender classification of Russian nouns
B2-3 Рина СУДЗУКИ	Группировка средств выражения количественности
C1-1 Jun NAGAI	Dramaturgy in Aleksei German’s <i>My Friend Ivan Lapshin</i> and <i>Khrustalyov, My Car!</i> and His Historical Recognition
C1-2 Тиэ ОГИ	Киногерменевтика как средство анализа фильмов Андрея Тарковского
C1-3 Юдзи КАДЗИЯМА	В поисках счастливого «Я»: тема творчества в фильмах Алексея Балабанова
C2-1 Акико ХОНДА	За пределы метродискурса: пространство метро в фильмах «Я шагаю по Москве» и «Настя» Георгия Данелии
C2-2 Shiho MAEDA	Representation and Function of the Late Soviet-era Monuments on the Great Patriotic War
C2-3 Yuuya SUZUKI	A deviation from the Soviet national architectural style or great strides in it: “Americanization” on the architectural projects “the Palace of Soviets” after its competition
C2-4 Идзуми МИЯДЗАКИ	Бывший иконостас в соборе Воскресения Христова в Токио
C3-1 Рэйя МИУРА	Музыкальная эстетика В.Ф.Одоевского – О восприятию западной музыки в России XIX века
C3-2 Масару ИТО	Музыкальность в творчестве Мейерхольда и Научно-исследовательская лаборатория
C3-3 Куми ТАТЭОКА	Женские образы в пьесе «Маскарад» Лермонтова и вопрос о ее инсценировках и экранизациях
C3-4 Владимир ЖДАНОВ, Дзюнъити СУДЗУКИ	Лермонтов в «интеллектуальном обиходе» русских мыслителей (к 200–летию со дня рождения)
C4-1 Такаюки САТО	К вопросу о символике "стихий" в скифстве
C4-2 Satoko KITAI	Communism without Lenin
C4-3 Mitsuharu AKAO	The Eastern Front and the Jews: Ambiguity of the Russian-Jewish Relations described in “The Destruction of Galitsia” (1920) by S.Ansky

C5-1	Emiko HIRANO	Ballet: “The Magic Mirror” and New Changes in the Russian Imperial Theatres in the 1900s
C5-2	Кейко САЙТО	Начальный этап знакомства японцев с советским балетом: на основе материалов Министерства культуры СССР
C5-3	Kumiko MURAYAMA	Changes in ballets from M. Petipa to M.Forkin, the significance of the changes in the ballet history —focusing on the aspects of the structure, the space, and the technique of their ballets
W	Workshop	Новая фаза в толстоведении (Такаси КИМУРА, Тэцуо МОТИДЗУКИ, Александр АЛЕКСАНДРОВ, Тадаси НАКАМУРА)
Q	Colloquim	Коллоквиум: доклады «Окончательные результаты анкетирования учащихся японских вузов по 6 иностранным языкам: ориентиры для обучения русскому языку», обсуждение. (Гота САЯМА, Юсукэ МИЯМОТО, Сачико ЁКОИ, Риэ ХАЯСИДА)

JASRL

September 2014

以下に掲載の研究報告要旨の本文は著者によって
提出されたものをそのまま印刷しています。

【A1-1】アンドレイ・プラトーフの創造的進化における抒情性と反抒情性の相克（『かつて愛し合った者たち』他）

野中 進

本報告では、プラトーフの未完の中編『かつて愛し合った者たち』（1927）を主たる分析対象としつつ、彼の作家としての発展段階における抒情性と反抒情性の相克、あるいはせめぎ合いという契機について考察しようとするものである。

プラトーフの特異な文体への有効なアプローチとして、われわれは比喻と文彩を分析することの重要性を示してきた。そこでのわれわれの仮説は、プラトーフの文体において隠喩／直喩の系と換喩／提喩の系が特徴的な関係を作っているというものである。より具体的に言えば、第一の系は形式的な新奇さに乏しく、反復と再認を主調としている。それに対し、第二の系は形式的な新奇さに富み、意味のレベルでの異化効果が特徴的である。この二つの系が独自の相関関係を形成することによって、しばしば「プラトーフ的」と称される特徴的な文体が作り出されていると考えられる。本報告でもこの仮説をベースに議論を進める。

『かつて愛し合った者たち』は、作家が1926年に技師として地方都市タンボフに出張した時期、モスクワに残った妻マリヤと交わした手紙を「編集し、加工して」、そのまま小説にしようとした実験的作品である。そのため、実生活（手紙）での抒情性が、文学創造を通じてどのように変容したか、という問いが立てられるだろう。とくに比喻と文彩の観点から「オリジナルの」手紙と「加工された」作品を比較することで、作家が生活と芸術をどう結びつけようとし、どう断ち切ろうとしたかを考察することができる。

プラトーフ文学をより全体的な意味で代表する長編『チェヴェンゴール』（1926-1928）や中編『土台穴』（1930年代前半）へと至る作家の1920年代の創造的進化に光を当てることが本報告の課題である。

（のなか すすむ，埼玉大学）

【A1-2】キュビズム小説としての IO. K. オレーシャ『羨望』

古宮 路子

本発表では、アメリカの文化史家 W. サイファーが提起した「キュビズム小説」という枠組みに即して、IO. K. オレーシャの代表的小説『羨望』（1927）の表現技法を検証する。オレーシャの表現技法の特色を探る試みは、M. チュダコーヴァによる研究などによって1960年代末に始まり、オレーシャ研究において主要な方法の一つとなっている。そこでとりわけ注目されるのが、この作家の文体において「視覚」が果たす役割である。オレーシャ独自の観察眼がどのような文章表現によって実現されているか、観察する行為とプロットとの間にどのような関係性が成り立っているか、といった問題の検証を通じて、この作家の創作においては視覚的ディテールがプロットから逸脱するほどの強い存在感を帯びていることが明らかにされてきた。

こうした従来の研究では、オレーシャの諸作品の並列的検証から表現技法の特性が論じられてきた。他の作家との比較は、あくまでオレーシャの独自性を探るために導入されている。それに対し本発表は、同時代に隆盛したキュビズムとオレーシャの表現技法の結びつきを探ることによって、この作家の独自性をより広い文化的傾向の中に位置付け、影響関係を明らかにしようとしている。

サイファーは A. ジイドの小説『贋金づくり』（1925）を例に「キュビズム小説」を提起しているが、本発表はその特徴を次の二点にまとめ、『羨望』の分析に応用する。第一に、多視点性。オレーシャは情景描写において、個々の対象を複数の視座から描き、正面のみならず、意表をついた様々な角度から提示している。このやり方は、分析的キュビズムの方法の文学での実践である。第二に、ディテールとしての「事実」の断片的導入。『羨望』の情景描写では、ディテールはストーリーの一部として抑制的に抽象化されることなく、個別に連ねられ、語り手（観察者）の視線の動きの再現に貢献している。こうしたディテールの描写方法は、描かれた物と現実の物が相互に作用し合うパピエ・コレを彷彿させる。

視覚的ディテールがプロットから逸脱する『羨望』の傾向の背景にあるのは、「キュビズム小説」としての特色である。多視点性は描写対象が単一のイメージに帰着することを阻み、「事実」の断片的導入は虚構（ストーリー）を内側から解体させている。

（こみや みちこ，東京大学）

【A1-3】 Литературный примитивизм: формы и пути развития

ГРЕЧКО Валерий

В противоположность смыслу слов, стоящих за его названием («примитивный, простой»), при ближайшем рассмотрении содержание понятия «примитивизм» оказывается весьма сложным. Обычно под ним понимается подражание «примитивным» художественным формам (этническим, народным, наивным и т. д.), которые используются профессиональными авторами в своем творчестве. С развитием эстетики авангарда в начале XX века примитивизм занял прочное место в практике и теории искусства. Примитивизм оказывается очень широким понятием, который выходит за рамки отдельных художественных направлений и групп. С одной стороны, ни одна из авангардистских групп не объявила себя «примитивистской», то есть этот термин не использовался в качестве самоидентификации. С другой стороны, практически у всех представителей авангарда можно в той или иной степени отметить наличие черт примитивизма.

В русском авангарде черты примитивизма можно проследить практически во всех видах искусства. Однако нужно отметить, что до сих пор термин «примитивизм» применялся в основном по отношению к живописи и другим пластическим искусствам. Литературный примитивизм – термин относительно новый, только в последние годы начинающий использоваться в литературоведении. В настоящем докладе прослеживаются разнообразные формы примитивизма в русской литературе на различных исторических этапах, начиная с творчества авангардистов начала XX века и до наших дней. Особое внимание уделяется установлению тенденций развития этого явления. Показано, что примитивизм в современной поэзии является явлением более сложного и гетерогенного характера, чем традиционный авангардистский примитивизм. Эта сложность связана не только с объектом подражания, но и с дифференциацией самого понятия «подражание», которую мы наблюдаем в современном искусстве.

(Гречко Валерий, 東京大学)

【A2-1】 プーシキンの二つの「旅」: 比較研究の試み

山下 大吾

プーシキンの晩年、1836年に雑誌「同時代人」の創刊号に発表された『エルズルム紀行』(以下『紀行』)は、彼自身がその序言で断っているように、1834年にパリで出版された一著作で自分の名を認め、それに触発される形で記されたものである。内容は彼が1829年に体験した対トルコ戦争のルポルタージュと捉えられるものであるが、テヘランで惨殺されたグリボエドフの遺骸との遭遇の場面が描かれていることや、自身の過去に記した抒情詩の散文による換言的表現が収められている点、あるいはトゥイニャノフの指摘する、トルストイの『戦争と平和』における戦闘描写に与えた影響など、これまでは主にロシア文学史的な観点から注目されてきた作品である。

一方プーシキンは、『エヴゲーニイ・オネーギン』(以下EO)の補遺の形で「オネーギンの旅の断章」(以下「旅」)も記している。『紀行』は散文によるルポルタージュ、「旅」は韻文によるフィクションの一部という、ジャンル並びに構成の差異が明確に認められるものの、両者共に旅行記の体裁をとったものであり、また「旅」においては、主人公であるエヴゲーニイの役割はEO本編と比べると明らかに背景に退いており、作者の体験が大きな比重を占めるものとなっている。

さらにロシアからカフカースへの経路において、途中までに訪れる土地が重複しているなど、両者は地理的観点から見ても共通点が多く、『紀行』では「旅」の土台となったプーシキン自身の南ロシア流刑時代の思い出がしばしば語られている。両者を比較対照することによって、それぞれの作品の持つ共通点や特色は、様々なレベルにおいてさらに明確に浮かび上がるであろう。本発表の主要な目的はこの点に存する。

共通点の一例として、西洋古典の果たしている役割が挙げられるであろう。「旅」ではその草稿において、EO全体で占める西洋古典の比重から見ると、極端とも捉えられる形でその引用や示唆が多数認められるが、『紀行』においてもホラーティウスの『詩集』からのラテン語原典の直接引用や、ホメロスの翻訳引用や『オデュッセイア』のエピソードを踏まえた個所などに遭遇する。同時代に記された彼の抒情詩などとの関連にも注目し、新たな考察を試みたい。

(やました だいご, 京都大学)

【A2-2】プレシチェーフと人格の探求

高橋 知之

拙稿「プレシチェーフの青春——ペトラシェフスキー・サークルの『預言者』」(『ロシア語ロシア文学研究』第45号, 2013年)で、私は「預言者を演じた詩人」というプレシチェーフ像を提示した。ここで描き出したのは、1840年代という時代を背景に、プレシチェーフが、自ら描いた「預言者」に自らを同化させ、サークルという場においてその役割を演じていった過程である。ただ、言うまでもなく、このような自作自演はプレシチェーフに固有のものではない。芸術と生活の密着はロマン主義的な現象であり、その双方を動員しながら、ある統一的な「人格」(仮面、役柄に近い意味での)を打ち出していく試みは、レールモントフを一つの頂点としつつ、デカブリストの詩人たちにすでに萌していたものだ。こうした「人格の探求」の流れのなかにプレシチェーフを位置づけ、改めてその自作自演のプロセスをたどり直してみたいというのが、本発表の趣旨である。

「預言者」の形象は、プーシキンやレールモントフの詩はもとより、ペトラシェフツィに少なからぬ影響を与えたデカブリストの詩人たちの詩にも登場する。また、ペトラシェフツィにとって「兄」の世代に当たるゲルツェンやオガリョフ、バクーニンらも、詩や書簡を通じて「預言者」という自己像を打ち出していた。プレシチェーフの「預言者」は、こうした系譜に連なるものといえるだろう。

一方で、1840年代という時代が、ロマン主義からリアリズムへの転形期にあったことも見過ごすべきでない。「人格の探求」という観点から見れば、イズムの変化は、あるべき人格の抜本的な見直しを要求するものである。例えば、リディヤ・ギンズブルグが論文『私的文書』と性格の創造(1977)で描いているように、ベリンスキーは、「現実」や「社会」といった要素を前面に押し出していくなかで、スタンケーヴィチ・サークルのロマン主義的世界観を批判し、現実性の追求にふさわしい新たな人格を模索していった。ロマン主義者の心性を保持しつつ、同時にベリンスキーの文学観に強く影響されていたペトラシェフツィが、こうした動きに無縁であったはずはない。新たな人格を模索していくことの困難さに、プレシチェーフがいかに対処したのか、あるいはいかに対処できなかったのか。この問題を明らかにすることが、本発表の目的である。

(たかはし ともゆき, 東京大学院生)

【A2-3】『長広舌と沈黙との対話』の展開

泊野 竜一

発表者はこれまで、ドストエフスキー作品の特徴的な対話表現である、「長広舌と沈黙との対話」について研究を行ってきた。「長広舌と沈黙との対話」とは、沈黙を守る聞き手に対し、話し手が、見かけ上一方的に長広舌を揮う形式を持つ対話である。発表者は、主として『カラマーゾフの兄弟』中の《大審問官》を考察し、「長広舌と沈黙との対話」を構成する四要件を導出した。そして、他のドストエフスキー作品と比較し、《大審問官》は、「長広舌と沈黙との対話」が発展するプロセスにおける、最終的な到達点であることを明らかにした。

本発表では、これら四要件のうち、「対話継続の条件」と名付けた最も着目すべき要件を分析する。その際、S. スカノフの研究を参考に、この要件を分析する手法として、「長広舌と沈黙との対話」における沈黙に、「狭義の沈黙」と「返答の代替行為による沈黙」の概念を導入する。一般的な意味の沈黙である「狭義の沈黙」に対し、「返答の代替行為による沈黙」とは、対話以外の行動で、見かけ上対話が妨害されて中断し、その結果、沈黙により対話が終了する場合と同じ効果が現れることを指す。ここでは、「返答の代替行為による沈黙」の典型として、キリスト(と思しき男)の大審問官への接吻、アリョーシャのイワンへの接吻を取り上げる。そして、「返答の代替行為による沈黙」前後で、特に長広舌の揮い手が、その心境を変化させる様を示す。ついで、『カラマーゾフの兄弟』中で、「対話継続の条件」を含む三つの対話、1) イワンとゾシマ長老との、教会と国家に関する対話、2) 《大審問官》、3) 「ロシアの僧侶」を取り上げる。そして、内容の共通するこれらの対話は、すべて「返答の代替行為による沈黙」で終了することを示す。以上の例から、「返答の代替行為による沈黙」は、対話を継続させる効果を担うことを示す。

また、ドストエフスキーの手紙によると、《大審問官》の理論は、「ロシアの僧侶」に対し敗北し、議論は決着する予定であった。この議論の決着を対照的に明示するため、R. ノイホイザーの示した、《大審問官》と「ロシアの僧侶」との平行な構造をドストエフスキーは構築した、と発表者は考える。しかし、「長広舌と沈黙との対話」は、そのような作者の思想的な意図を裏切り、結果として一連の対話を継続させる程、強力で有効な文学上の技法であることを、本発表では示唆したい。

(とまりの りょういち, 早稲田大学院生)

【A3-1】ソログープ『光と影』における演劇的存在としての「子供」について —エヴレイノフとの比較から—

竹内 ナターシャ

ソログープの短編小説『光と影』《Свет и тени》(1894)について、発表者は作中の影絵遊びの主体である「子供」に着目し、やはりソログープの作品に顕著な「変容」のテーマに繋がるものとして「演劇」が果たす役割の重要性を提起する。『光と影』に関してはプラトン哲学的な解釈、またタイトルの通り光の世界と影の世界で後者に惹かれる子供の悲劇といった二元論的な解釈がある一方で、その影絵遊びの場面の演劇性についてはこれまで触れられてこなかった。しかし、特に影絵遊びの場面にはソログープが10年以上も先の1908年に執筆することになる演劇論「一つの意志の演劇」(«Театр одной воли»)で語っているような彼自身の演劇観が既に実践的な形で表れている。そして影絵遊びを主導する創作者は、「変容」を目指す「子供」であり、「子供」と「演劇」は密接に繋がっている。

「子供」と「演劇」に関して、ソログープと親交もあり戯曲の上演も手掛けたH. エヴレイノフの『自分自身の為の演劇』にはソログープの演劇論や、特に子供の遊戯としての演劇に関してよく似たイデーが見られ、特に「五本指のお芝居」などはまさに『光と影』の影絵遊びを彷彿とさせるものでもあり、ソログープの演劇論との主張も重なる。ソログープとエヴレイノフの比較と類似の論証は既にショームキンがその論考「エヴレイノフとソログープ 『鍵番ワニカとお小姓ジャン』の上演史に寄せて」で興味深い指摘を行っているが、『ドン・キホーテ』『ロビンソン・クルーソー』への強烈な関心などこの二人にはそこでは汲み取られ切れていない共通点が多々ある。特に、中でも重要な「子供と演劇」に関する指摘が為されておらず、発表者はそれこそが最重要な共通項と考えているので取り上げたい。

また演劇性の指摘が重要であるのは、「演劇とは最も深淵な芸術」というソログープ自身の言葉や、リュビーモフによる指摘も既にあるが、ソログープにとって演劇とは単なる表現の一媒体としてではなく極めて重要な芸術であった為である。演劇人であるエヴレイノフとの比較を通してソログープの演劇観において如何に「子供」の果たす役割が大きいのか、それがどのように「変容」というテーマに繋がるか、そしてそれらを繋げる演劇という概念が戯曲に留まらずソログープの作品を通底する重要なものであることを主張していく。

(たけうち なたーしゃ, 早稲田大学院生)

【A3-2】愛着と盗難 —ブーニン『乾きの谷』についての考察

林 由貴

本報告は、これまで焦点化されてこなかった、ブーニンにおけるアンビヴァレンスの表象の解釈可能性を見出す試みである。とりわけ『乾きの谷』(1911)において、女中であるヒロインが領主の「鏡を盗む」テーマが、近代小説的なプロットを解体させる様々な不条理の表象に対して、いかなる流れを生むのかを考察する。また、作家における否定的詩学の本質的意味を明らかにすることは、『暗い並木道』(1938-1949)等、亡命後の恋愛のテーマを底流する「暗さ」のテーマを解釈する上でも、検討されるべきであると思惟する。

『乾きの谷』では、『村』(1909-1910)で濃密に描かれた悲惨な農村生活や、身分制を逸脱した領主と女中の親密空間を文脈としながら、実際には非人道的な社会慣習や制度によって縛られた個の意志の表明、さらには孤立した自我の親密空間への関与、そして関与の妄想それ自体の表象である「鏡の盗難」が描かれている。

愛着によって犯された窃盗劇がかろうじて人間中心のプロットを支えている一方で、領主による女中の流刑という懲罰と愛着対象の頓死のプロットは、疑似的な恋愛関係としてヒロインによって幻覚されていた身分制による社会的束縛を切断する。すなわち、『乾きの谷』で反復される喪失のイメージが、女の一生に投影される自己の記憶の消滅を表現するものであると同時に、女中が思慕する領主の鏡を盗むことは、対象を永遠に所有しようとする隠された情念を、さらに女中の流刑は情念の懲罰と愛着との別離の暗喩となっている。

そのほか、作家の生涯作品にわたり散見される墓地の表象は、『乾きの谷』においても、集団的ないし個人的な記憶の恒常化を拒否する記号として、物語世界に別の「流れ」を醸し出している。生活世界一切の固有名の「乾き=消滅」に向かうプロットの不可逆的な流れは、密閉的な記憶の円環構造を批判し、代表作『軽い呼吸』(1916)に繋がるもう一つのフォルムとしての読みの可能性を開いている。このように、「乾きの谷」への「愛着」の表象が「鏡の盗難」を転機として固有名の無化へと流れ込む物語は、『軽い呼吸』への道標となるべき詩学の豊饒さを匂わせている。

(はやし ゆき, 東京大学院生)

【A3-3】 解読される世界 —危機の時代のアンドレイ・ペールイー—

東 和穂

本発表の課題は、1922年に出版されたアンドレイ・ペールイーの小説『変わり者の手記』を主な分析対象としつつ、同時期に彼が書いた他の評論・エッセーなども参照することで、1916年から1923年におけるペールイーの思索を跡付けることである。

『変わり者の手記』は、当初の構想では、『コーチク・レターエフ』、『受洗した中国人』と共に自伝的大長編小説『叙事詩』の一部となる筈だったが、この二つとは全く異なる性格を持っている。今日に至るまでこの作品を失敗作と断じる論者は少なくないが、そもそも『変わり者の手記』を一般的な意味での小説と呼ぶことは出来ない。この作品の語り手は作者ペールイーに限りなく近い存在であり、この時期の彼についてある程度の知識を持たない読者には、この作品を理解することは困難であろう。他方で、自伝と呼ぶには余りに思弁的、旅行記と呼ぶには余りに断片的なこのテキストの中では、虚構的要素もまた重要な役割を演じている。結果としてこの作品は、ジャンルの未分化の、エッセーの如きものとなっている。

だが見方を変えれば、この作品を虚構世界の中で完結していない、「開かれた」作品と見ることも可能であり、そこに未分化のまま提示されている様々な思考を同時期に書かれた彼の評論・エッセーへと接続させることで、詩や小説の分析だけでは見えてこない、ペールイーの創作における或る一面を照射することも出来る。その際、注意しておきたいのは、ここで扱われるものが伝記研究、作家論のそれとは全く別のもの、即ち、ボリス・ニコラエヴィチ・ブガーエフという人間の生活そのものではなく、アンドレイ・ペールイーという芸術家の、或る時期の芸術を巡る思索である、ということだ。

ペールイーは1916年から1923年にかけて深刻な精神的危機に陥るが、それは彼にとっては創作の方法論、思想、認識論の問題だけに留まらず、革命前後のロシア社会との関わり方、さらには彼自身の私生活にまで再考を迫る、まさに全般的危機であった。『変わり者の手記』において、世界は語り手の前で意味を失い、意味不明の文字の羅列と化するのだが、この暗号化された世界の前で、何らかの意味を読み取ろうとする試行錯誤が、この時期に書かれた彼の評論やエッセーには窺われる。その過程で、文学テキストにおいて文字という要素が持つ意義を再認識したペールイーは、この精神的危機を何とか切り抜け、そこから最晩年の創作期へと進んでいく。

(ひがし かずほ、東京大学院生)

【A4-1】 ユートピアからアンチユートピアへ：ドストエフスキーとザミャーチン

樋口 稲子

最初のユートピアは神が人間を祝福して与えたエデンの園であった。しかし、神に対して従順なアダムとイヴが蛇の唆しを契機に神に背き、人間中心の世界のアンチユートピア世界へと踏み出してゆく。この事は、人間が独立と自由と無限なる知を求めて、神の創造した〈有限なる人間〉という枠を越えようとした事を意味する。即ち、人間が神の囲い者としての存在から、人間としての完全なる存在を獲得しようとして行った行為である。しかし、これは原罪となり、罰する神と罰せられる人間、絶対的支配者と従属する罪人という関係を生む事になった。神の掌より降り、神の囲いものから独立した人間へと転換した事は、神に対する初めての人間の勝利であった。人間に神の戒めを破らせたものは、人間をそのように駆り立てる知に対する限りなき渴望であり、自己の存在の充足への欲求である。そもそも、神の戒めとは、神が人間に課した人間の限界線であった。これが踏み越えられた事は、エデンの園が人間には決してユートピア世界ではなかった事を意味する。

「大審問官」では、自由が必ずしも肯定的意味を持っていない。何故なら、〈自由〉を得る事は、主体性を持つことであり、その主体性は自己の立脚点となるからである。自由は人間に耐えがたい苦悩を背負わせるというのは事実である。故に、大審問官には、〈人間の独立と双生児である自由〉の無い世界こそ、人類に可能なユートピアだと思われた。神の救済が示す道は、人類には余りにも苦難の道であり、故に彼は、神の救済の道から人類の殆どの人間を取り除き、神の絶対性と神に従う人間との構図を破壊させる神に対するカーニバル機能をキリストに仕掛けた。

人類は、人間の知の自由によって人間中心の文明と歴史を築いて来た。だが、ロシア革命も、ザミャーチンの小説『我ら』も、ユートピア世界を築こうとして築く事の出来ないアンチユートピア世界であった。

本報告では、上記のプロセスを辿りながら聖書「エデンの園」、ドストエフスキーの「大審問官」、ザミャーチンの『我ら』におけるプロット上で、具体的に登場人物を対比させながら類似性を考察し、アンチユートピア性の類似点、相違点について指摘すると共に、特にザミャーチンの小説『我ら』においては、「大審問官」の影響についても言及する。

(ひぐち いねこ、早稲田大学院生)

【A4-2】M・ブルガーコフ文学における「家表象」の変化

秋月 準也

本発表では、ブルガーコフ文学における「部屋の増減」を扱った先行研究の分析を通して、ブルガーコフの家の描写手法が革命前と革命後で大きく変化していることを述べる。

近年、ソ連科学史と同時代のSF文学との関係を研究しているニコライ・クレメンツォフは著書“Revolutionary experiments: The quest for immortality in Bolshevik science and fiction”(Oxford University Press, 2014)の中で、ブルガーコフのSF小説『運命の卵』が「1920年代のソ連の現実の一部分に、つまり新しいソ連体制下と結びついた生物学と生物学者に、はっきりと意図的に焦点が合わせられている」ことを強調している。そして、体制による科学者の評価の変動をあらわすものとして例に挙げられるのが、主人公ペルシコフ教授の部屋数である。『運命の卵』で革命前のペルシコフ教授は、モスクワの一等地に家政婦付きの5部屋を所持しており、これは帝政ロシアにおいて世界的科学者が享受していた特権の象徴であった。しかし社会主義革命後に科学者が特権階級の一員とみなされた流れを受けるように、1919年にペルシコフ教授の部屋数も2部屋に削減され、彼の研究環境は急激に悪化する。ところがはやくも1922年頃からソ連体制下の科学者の地位は回復し始め、社会的進歩の担い手として再び賞賛される対象となり、それに合わせるようにペルシコフ教授の部屋数も元の5部屋に戻るのである。このような部屋数の増減に関する議論はB・パペルヌイの『文化2』においても見られる。パペルヌイの見解は、ブルガーコフの『犬の心臓』とその主人公プレオブラジェンスキイ教授を例に、垂直志向でヒエラルキー的な帝政ロシア期(文化1)から革命を経て急速に水平志向(文化2)へシフトし、1921年のI・パヴロフなど世界的な功績を持つ科学者に対する例外的な待遇を認めるレーニン署名の法令施行を契機として垂直志向(文化1)の復活が始まるというものであった。

このような両者の考察は、ブルガーコフの革命前を舞台とした小説『白衛軍』における家の描写と比較することでさらに大きな文脈で捉えられるのではないだろうか。『白衛軍』のトゥルビンの家は「ペチカ」や「掛け時計」といった象徴的なものを中心に成り立っていて、部屋の数は重要な意味を持っていない。それに対し『運命の卵』や『犬の心臓』の科学者たちの家は、象徴的なものに関する描写が一切排除され、「5→2→5」と数字の羅列であらわすことが可能な唯物的な家として描かれている。つまりブルガーコフの文学は『白衛軍』の象徴的世界から『運命の卵』、『犬の心臓』の唯物的世界へと大きく移り変わったのである。

(あきづき じゅんや、北海道大学院生)

【A4-3】M・ブルガーコフの最初の妻ラッパー

石原 公道

ブルガーコフは第一の妻タチヤーナ・ラッパーと1908年夏、知り合う。若すぎるし、まだ学生だと、彼の母が反対したが、13年4月、教会にて結婚。ラッパーは、大学卒業後、医者となった夫を助ける。スモレンスク県の自治会郡医となった時、看護婦役を勤め、後キエフ、ヴラジカフカース、バトゥーミからモスクワに出ることとなるブルガーコフに従った。21年末から彼がジャーナリズムで活躍を始め、24年1月《その前夜》社のパーティーでリュボーフィ・ペロゼールスカヤと知り合った後、24年4月離婚。ブルガーコフは離婚後、折に触れ別れた妻に金銭的援助。

ラッパーは1933年ブルガーコフの友人のA.クレシコフと結婚。46年に別れ、47年にД.キセリゴフとツウアプスで暮らし、ある時、彼がブルガーコフに嫉妬して、「お前は今でもあの男を愛しているのか!」と叫んで、彼女の留守に、原稿や、一件書類、写真等を破棄したと後に語った。1974年夫の死後、ブルガーコフ研究者たちを受け入れるようになった。

「1975年のことだった。『青春』誌編集部に、ツウアプスのラッパーの元へ派遣するよう頼んだ。…私は知っていた、…ブルガーコフとラッパーには何らかの約束があったことを、B.モロツォフやM.チュダコーワが、彼女から何も得られずに去ったことを。…ミハイル・ブルガーコフが彼女に与えた約束から、自由になるためにどのような鍵を選び出したかを、私は決して書かなかった(ひょっとしてまた書くことがあるかもしれないが、おそらくは決して書きはしないだろう。当時は大層自分の行動を誇っていたが、かつて彼を愛していた女性の口を封印したブルガーコフの賢明な意志に逆らって進んだことが、馬鹿げた行動だった、と今や理解した)。…私の論文は発表されることなく、…K.カヴァーリジンが使用法を見つけて、…チュダコーワの利用に供した。」(リジャ・ヤノーフスカヤ『ミハイル・ブルガーコフ覚書』M. 2002. c.390)

自伝的要素の強い『白衛軍』、『若き医者の手記』、『モルヒネ』等の初期作品の登場人物の一人としては、ラッパーは微塵もその影もない。ブルガーコフのその意図はいかなるものであったか。定評あるM.チュダコーワ『ミハイル・ブルガーコフ伝記』M.1988.-496c.2-eと「ミハイル・ブルガーコフ家族年代記」(Jl. パルシン著『モスクワのアメリカ大使館の妖魔もしくはM.ブルガーコフの謎13』M. 1991. パルシンによるラッパーの聞き書き)等の記述でラッパーの実像が、いかに形成されたか探ってみたい。

(いしはら きみみち、関東支部)

【A5-1】 ヨシフ・ブロツキーと牧歌

関 岳彦

ヨシフ・ブロツキーの創作において、「牧歌」(エクログ、パストラル、ブコリック)は、数多く存在する「エレジー」と比較すると、大きな割合を占めるジャンルとは言い難い。しかしながら、六十年代の『野の牧歌』から八十年代の『牧歌四(冬)』(以下『牧歌四』)、『牧歌五(夏)』、未完の『牧歌六(春)』に至るまで、牧歌的な内容の詩がある程度の期間書かれ続けたということは、ブロツキーにとってこのジャンルが一定の重要性を持っていたことを意味しているはずである。

この中でも1980年(あるいは1977年)に執筆された『牧歌四』は、ウェルギリウスの牧歌第四歌との関係、伝統的な牧歌的風景と一致しない冬という舞台設定、レフ・ロセフが「本質的にエレジーだ」と指摘する非牧歌的な内容から、最も注目すべき作品だと考えられる。事実これまでも、ウェルギリウスとの比較や亡命のテーマに着目した研究がいくつか存在しており、ブロツキーが書いた牧歌の中では最も研究が進んでいるものと言える。これらの研究はいずれも興味深く、優れたものであるが、『牧歌四』というよりもブロツキーにおける牧歌というジャンルが研究対象となっている、あるいは逆に『牧歌四』を論じる際に、ジャンル自体や牧歌の伝統の意味が軽視されているというところがあるのも否定できない。また、比較的初期である六十年代の作品と八十年代の牧歌との間に時間的隔たりがあることは、七十年代後半から八十年代初頭にかけて、詩人を再びこのジャンルに向かわせる要因があったことを示唆しているが、この点についても言及しているものは少ない。

そこで本発表では、従来の研究と同様に『牧歌四』をウェルギリウスの牧歌と比較するだけでなく、西欧文学における牧歌や、この詩以前や以後に書かれたブロツキーの牧歌的な詩とも比較しつつ分析を行い、『牧歌四』が持つ意味を明らかにする。それとともに、なぜブロツキーは十年以上の時を経て「牧歌」と題される詩を連続して書くに至ったのか、またブロツキーにとっての牧歌というジャンルが持っていた意味が、亡命という事件を含むその時間的隔たりの中でいかに変化したのか、という問題を論じたい。なお分析にあたっては、オリジナルのロシア語版に加え、これまでの研究では無視されることが多かったブロツキー自身による『牧歌四』の英訳も検討の対象とする。

(せき たけひこ, 東京大学院生)

【A5-2】 ディアスポラ文学としてのロシア・トランスナショナル文学

中野 幸男

祖国から発し祖国へ還元される従来の亡命文学と異なる様相の、必ずしも祖国に還元されない現代文学は世界中で見られている。ロシア文学におけるこの状況は Russian transnational literature あるいは Russian “hybrid” literature などとも表現されている。言語から見れば、アメリカやカナダ、ドイツにて英語やドイツ語で書くロシア系作家(たとえば英語圏ではゲーリー・シュタインガート、デイヴィッド・ベズモーズギス、オルガ・グルーシン、エレン・リットマン、アーニャ・ウリニッチ、ドイツ語圏ではアリーナ・ブロンスキー、ヴラジーミル・カミーナーなど)が存在し、作家たちは同時にロシアのメディアでもロシア語でインタビューに答えることも多い。英語・フランス語・ドイツ語で書くロシア系作家を主に扱ったエイドリアン・ワナー(2011)などの先行研究によりバイリンガリズム、ノスタルジア、アイデンティティーなどの問題も現在までに整理されてきている。一方で、例えば現代ドイツ語作家の出自の多様さ(ロシアに限らず東欧圏からの影響は Eastern Turn と呼ばれ、ブルガリア、ポーランド、チェコ、ハンガリーなどに深く関係する作家などがある)やアメリカ・ユダヤ文学の歴史から眺めたときに、ロシア=ユダヤ系作家にとってどの程度ロシアという枠が意味を持つ分類なのかという問題がある。また、ベズモーズギス、ヴァプニャール、シュタインガートなどが掲載された『ニューヨーカー』という雑誌自体がユダヤ系の作家の作品が地位を築き上げる場所となっていたことのように、アメリカ・ユダヤ文学史の中にロシア=ユダヤ系作家を位置付けてみる必要がある。ロシアに対するノスタルジアや、ロシア人としてのアイデンティティー、母語としてのロシア語と創作に使われる言語のバイリンガリズムの問題に関しても、例えばアーヴィング・ハウの「他人のノスタルジアへのノスタルジア」という言葉に代表されるように、必ずしもその世代に経験されていない事実に対する間接的な「ノスタルジア」の問題があり、アメリカにおけるユダヤ系ロシア人とロシアにおけるユダヤ人の間にある「アイデンティティー」の問題があり、また「バイリンガリズム」においては、作品における言語習得や通訳のエピソードと作者自身の言語習得・翻訳の問題などが存在する。とりあげる作家の背景紹介と作品内容の概略を語ったうえで、アイデンティティー、バイリンガリズム、ノスタルジアの問題を論じる。

(なかの ゆきお, 東京大学)

【A5-3】 ロマン・キムのスパイ探偵小説におけるアイロニーの問題

坂中 紀夫

探偵小説の読者は、それを読み進める中で一種のアイロニカルな態度を迫られることがある。意外な真相の提示を一つの命題とするこのジャンルでは、例えばダイニング・メッセージや密室のような奇妙な状況が設定され、探偵がそれを論理的に解明していく。その際にしばしば投げかけられるのが、「そんなことが起きるのは探偵小説の中だけ」といった台詞である。多くの場合、探偵に比して凡庸な「ワトスン」の人物が発するこうした言葉は、事件が発生した空間をそれと特殊に限定し、真相の解明がその内部で進んでいることを読者に想起させる効果を持つものとして捉えることができる。だが、この捉え方には、探偵小説を形式的なゲームとして見るアイロニカルな視線が前提にある。同じことは、そのゲーム性をさらに徹底させたスパイ小説にも見出すことができるだろう。「小説に描かれるスパイは現実的ではない」といった台詞を、他ならぬ作中のスパイが語るような場合である。

スパイ・探偵小説におけるこうしたアイロニカルな自己言及は、ロシア探偵小説の先駆とも言われるロマン・キム(1899-1967)の諸作品の検討にとっても興味深い問題である。というのも、探偵小説についての先のような言辭は彼の作品においても散見され、またイアン・フレミングのスパイ小説などはとりわけ批判的とされているからだ。この問題に関して特に重要なのが、短編«Дело об убийстве великого сыщика»(偉大な探偵の殺人事件)であろう。これは、「ホームズ」という探偵が殺害されることについて描いた一種のメタ・ミステリであり、それ自体が探偵という存在の条件をめぐる探偵小説となっている。このように、キムはスパイ・探偵小説に対してアイロニカルな距離を取りながら、同時にそこで作品を書いているのである。それは、読者が探偵小説に白けつつ没入するのに類比的である。当発表は、最新の研究が明らかにしつつあるキムの伝記的な事実にも目を配りながら、彼の作品におけるアイロニーの問題を検討する。

キムの経歴については、インターネット上で丁寧にまとめられたものを日本語で読むことができるが、その作品についてとなると、翻訳されたものを除き、殆ど知られていない。当発表は、彼の諸作品の紹介にも資するものである。

(さかなか のりお, 同志社大学)

【B1-1】 感情・評価表現に見られるニコライ・ゴーゴリの精神状態の変化

世利 彰規

評価や意見を意味する言葉を手がかりにしてゴーゴリの思想の変化と狂信的な死の兆候を数値化した客観的なデータで読み取るというのが本発表のねらいである。

筆者はこれまでロシア語のモダリティやモダリティの意味を表す挿入要素についてロシア語の文体論や語学の分野で貢献するよう研究を続けてきた。今回はそれまで得られた知見を応用し、具体的なロシア文学のテキストの分析をおこなう。

19世紀の文学者ニコライ・ゴーゴリを分析対象とする。ニコライ・ゴーゴリは「死せる魂 第二部」の執筆中に精神的な危機を迎える。これは彼のその後の狂信的な死とも関係しているとされている。

前回の発表で明らかになったように評価や意見を表す挿入語句が使用される頻度は作家によってさまざまに異なる。例えばトゥルゲーネフにおいてはあまり多く見られないのに対し、ゴーゴリは比較的によくこのような挿入語句を用いる。評価や意見を表す挿入語句の現れる頻度はどの作家の作品においても少ないことがわかっている。そこで今回は評価や意見を表す他の語句を分析対象とする。ゴーゴリという一人の作家の著作物を時系列上に見た場合、感情・評価に関わる表現の使用頻度や用法に変化があるのだろうか、というのが本発表で提起する問題である。

分析に際しては計算機によるテキスト処理の手法を用いる。まず電子化されたテキストを入手する。そしてそのテキストから問題とする評価や意見を意味する表現を含む箇所を取り出す。その箇所としかるべく校訂されたテキストの該当箇所とつきあわせて吟味する。こうして数値化されたデータを取り出す。

現在考えている方針として、ゴーゴリの精神的危機の原因となったとされる「死せる魂 第二部」および「友人との往復書簡」以降の著作とそれ以前の著作における評価や意見に関する挿入語句の出現頻度を比較する。作品ごとの数値データを時系列状に並べて違いを視覚化する。分析に用いる尺度として現在考えているのはユニグラムである表現そのものの出現頻度の他に隣り合う語句を問題とするバイグラム・トライグラム(共起頻度)などを考えている。また個別の具体的な例文を検討することによって言葉に現れるゴーゴリの心理状態の変化の兆しを明らかにする。

(せり あきのり, 東京大学院生)

【B1-2】古代教会スラブ語の分詞の統語的用法上の差異と短・長語尾形の関係について

恩田 義徳

古代教会スラブ語（以下OCS）において、形容詞には短語尾形と長語尾形の区別がある。この短語尾／長語尾の対立は不定／定に対応し、たとえば名詞との結合においては未知の情報については短語尾形で、既知の情報については長語尾形を用いてあらわされるということが知られている。この情報構造上の区別については長語尾形が元来、指示代名詞であったと考えられる形態が短語尾形に結合した形であるという語源的事実からもうかがうことができる。形容詞に準ずる形態をとる分詞にも短語尾／長語尾の区別が存在する。分詞と形容詞とでは、名詞を修飾する、単独で名詞として用いることができるといった統語上の共通点がある一方で、たとえばいわゆる分詞の第二述語的な用法や動詞の補語としての用法といった点では差異が見られる。したがって形容詞における短語尾／長語尾の対立をそのまま分詞に応用しただけでは不十分であり、分詞については別途検討の必要がある。

本研究では分詞の短語尾形と長語尾形について、それが用法上どのような違いとなって現れているかを検討することを目的とする。検討可能なカノンのうちとくに福音書に対象を絞り、マリア写本・ゾグラフィオス写本・アッセマーニ写本・サバの本の4つのテキストをパラレルに検討し、実際のテキストにおける具体的な例を収集・検討することでOCSの共時的観点からの記述を行う。

OCSには成立の経緯からギリシア語の影響が多く見られる。短語尾形／長語尾形の区別についてはギリシア語の冠詞の用法と深い関係にあり、ギリシア語において冠詞がない場合には短語尾形が、冠詞がある場合には長語尾形が対応することが知られている。上述の検討によって得られた結果をギリシア語における冠詞の用法と対照することで、ギリシア語の分詞の用法がどのようにOCSへと導入されたかを明確にし、また、実際のテキストでの冠詞と短語尾／長語尾の現れ方を比較することでギリシア語テキストとOCSテキストの関係性についても言及する。

(おんだ よしのり, 筑波大学)

【B1-3】ロシア語かセルビア語か、それとも他の言語か？ ザハリヤ・オルフェリン（1726-1785）の詩作品の言語的特徴について

西原 周子

19世紀半ばに民衆語に基づく文章語が成立したセルビア語だが、18世紀には、複数の文章語（教会スラヴ語、ロシア文章語、セルビア民衆語、スラヴ・セルビア語）が使われていた。中でも啓蒙主義的知識人ザハリヤ・オルフェリンは諸文章語を使い分けていたことで知られ、19世紀の文語改革への流れを理解する上で、当時のエリート言語分析は重要課題である。

B. ウンベガウン（1935年）のセルビア文章語史の時代区分のうち、ロシア教会スラヴ語、ロシア文章語、スラヴ・セルビア語が支配的であった第2段階（1740年代～1780年代）にオルフェリンは活動したが、彼の著作は必ずしもこの時代区分に対応しておらず、第3段階（1780年代～19世紀初頭）で支配的となるセルビア民衆語の要素が混在しているのが特徴的である。各言語要素の割合は作品ごとに異なり、特に詩作品においてその多様性が際立っているが、全ての詩作品に対する横断的な研究は今まで行われてこなかった。そこで各詩作品が何語で書かれているのか、なぜそう判断できるのか、また言語がどのように使い分けられているのかを分析するのが本報告の目的である。

本報告で詩作品に焦点を当てるのは、彼が著作を残した様々な分野（詩、宗教作品、教科書、伝記、大衆向けの啓蒙書等）の中でも、詩作品が初期作品の主流ジャンルとなっているためである。詩作品は、彼が啓蒙主義的活動として代表作の一つである「スラヴ・セルビア雑誌」（1768年）に着手する以前に、ほぼ時期を限定して発表されており、オルフェリンの活動初期における文体と言語観を考察する鍵として、詩作品の言語分析は重要と考えられる。

分析の枠組みとして、A. ムラデノヴィッチの「オルフェリンの『雑誌』におけるロシア教会スラヴ語とセルビア・クロアチア語の特徴について」（1970年）を用い、特に正書法、音声・音韻、形態、語彙的特徴について、全詩作品に対して計量的分析を行うことで、特徴づけることとする。

加えて、言語の分析を踏まえた上で、本報告では当時のロシアからの影響に注意を向け、特に文学の潮流がオルフェリンにいかなる影響を与えていたかについても考察する。

(にしはら しゅうこ, 北海道大学院生)

【B2-1】ロシア語の造格の不変的意味について

井上 幸義

本発表では、多義性を有するロシア語の造格の不変的意味の可能性について、共時的・通時的視点から考察する。

ロシア語の造格の用法は、歴史的に多様化が進み、道具、手段、随伴性(социативность)、転化、比喩、動作様態、総体、程度、限定、原因、移動の場所、時間、主体、客体、述語など大きな多義性を有することになり、その不変的意味を抽出することは困難とされる。ポテブニャは、場所の造格と随伴の造格を原初的造格とみなし、ロマン・ムラーゼクは、それらを随伴と手段の造格に求める。一方、ヤコブソンは、格の一般的意味のうちの周縁性に造格の特性を見出そうとする。

本発表では、造格が表す「道具・手段」を、身体の延長部分として主体によってその動きがコントロールされることにより活動性が付与された、主体の不可分の部分として認知されるものと捉える。この活動性が、逆に主体に向けられる場合、受け身としての客体や病気などの原因の意味となると推定し、造格の個別の意味との関係を検証していく。そこで示唆的なのは、ヤコブソンによる、対格と造格との違いを示す以下の例文である：

1. *Чтобы пробить стену, они швыряли в нее камнями.*
2. *Он бесцельно швырял камни в воду.*

ヤコブソンは、造格(камнями)を補語とする例文1では、話し手の意識は、話の内容にあり、一方、対格(камни)を補語とする例文2では、話そのものにあるとしている。ここで注目すべきは、例文2では、直接補語の対格(камни)は動作が直接向けられる対象を表し完結しているために、方向を示す状況語(в воду)はなくても文が成り立つのに対し、例文1では、状況語(в нее)は省略することができないという事実である。ここで造格(камнями)は、主体によって壁を目掛けて動作がコントロールされる手段を表し、投げるという動作は、石によって(камнями)壁に当たることで完結するため、動作が指向される目的(в нее)が不可欠となると考えられる。すなわち、造格は、投げられた後の動作(壁に向かって当たる)を実現可能にする活動性を有していると言える。本発表では、造格が表す儀礼的な意味や、造格を伴う前置詞 перед, за, над, под, между との関係についても考察したい。

(いのうえ ゆきよし, 上智大学)

【B2-2】ロシア語における名詞の性の分類について

光井 明日香

一般的にロシア語の性は男性、女性、中性の3つであるとされている。しかし、多くの研究者によって、ロシア語における文法性の分類は上記に留まらないという事実が指摘されてきた。例えば、男性を指示する際には男性名詞としてのふるまいを、女性を指示する際には女性名詞としてのふるまいをするいわゆる総性(общий род)名詞があげられる。さらに、врач「医師」などの職業や社会的地位などを示す男性名詞もあげることができる。これらの名詞は女性を指示する際に定語や述語が男性形で一致する統語的な一致だけでなく、女性形による意味的な一致も行う。

本発表の目的は、一致の観点から特に人間を指示する名詞の性の分類を記述的に再検討することである。本発表では Crockett の指摘する自然性に言及のない(asexual)名詞という概念を採用し、Crockett が文脈によって性が決定されるとしている名詞について考察をしていく。その中に врач などの第1変化の男性名詞も含まれるが、Corbett はこれらを hybrids と呼び、総性名詞とは区別している。しかし、Corbett が指摘している第1変化の男性名詞だけではなく судья「裁判官」などの第2変化の男性名詞や конференсье「司会者」などの人間を指示する不変化の男性名詞も女性を指示する際に意味的一致をすることが出来る。本発表ではまず、第1変化の男性名詞と第2変化の男性名詞、不変化の男性名詞のふるまいについて共通点と相違点をまとめ、発表者が行ったアンケート調査のデータも加えながら Corbett の hybrids を再検討する。

次にいわゆる総性名詞について考察を行う。一般的に総性名詞は男性を指示する際には男性名詞としてのふるまいを、女性を指示する際には女性名詞としてのふるまいをするとしてされているが、男性を指示する際に定語が女性形で一致する例や、女性を指示する際に定語が男性形で一致するという例が見られる。Иомдин はこれらのふるまいの多様さについて総性名詞を3種類に分類して説明を行っている。本発表では Иомдин による総性名詞の分類の妥当性を記述的に考察し、その分類の問題点を挙げ、総性名詞の分類が3種類にとどまらないことを指摘する。また、総性名詞と第2変化の男性名詞との境界があいまいであることも示し、性の分類はきれいに線引き出来るものではないことを提示する。そして Crockett が文脈によって性が決定されるとしている自然性に言及のない(asexual)名詞は、男性的なものから女性的なものへのある種のグラデーションを描いているという可能性を提示する。

(みつい あすか, 東京外国語大学院生)

【B2-3】数量表現における構成要素の分類

鈴木 理奈

数量的性質の表現手段および事物を数え測る様々な方法はあらゆる言語に存在する。数量は数によりまたは数を用いずに表わすことが可能である。数量は文法的な数、あるいは数詞や数詞的な名詞、数量的形容詞や副詞の要素により示される。

数を用いない数量表現は、文法的な数 *бумага - бумаги*, 語彙の形 *молодёжь*, 比較級 *дороже*, 最上級 *высший*, 前置詞と数量単位の構成による形 *отдохнуть с час*, 数量名詞と前置詞の構成による形 *размером с пылинку*, の手段により示される。また具体的な数を含まない不定数詞 *немного* 等による手段もありえる。

しかし数量表現においては数の要素が第一に用いられると言える。その表現法には数詞を用いた形と、数詞から派生された語を用いた形が挙げられる。ロシア語の数詞には、個数詞 *десять страниц*, 順序数詞 *третий автобус*, 集合数詞 *четверо братьев* 等がある。さらに数詞から派生された語として、小数 *три десятых части корзины*, 倍数 *двойной труд*, 可数 *двоичный код* 等の手段も可能である。

数量表現は数量名詞 *величина, диаметр, размер* 等の要素により、数値的指標を具体化され組織的な表現が可能となる。数量名詞による表現では、数を用いるまたは数を用いない形がありえる。(例) *круг диаметром десять сантиметр; круг размером с монету*。

この数量名詞語形は通常、数量名詞、数詞、数量単位を基本の構成要素とした統語素を形成する。また従属的成分 *до, около, более* 等を伴いさらに表現を複雑化させる。

ロシア語の文法書では数量表現に関わる多数の要素が取り上げられているが、数量名詞による数量表現については触れていないものが多く、まだ多くの研究要素が残されている。本発表では数量表現手段の一つとなるその数量名詞の構造についても示したい。

(すずき りな, 札幌医科大学)

【C1-1】アレクセイ・ゲルマン『わが友イヴァン・ラブシン』と『フルスタリョフ, 車を!』におけるドラマトゥルギーと歴史認識

長井 淳

アレクセイ・ゲルマンの最後の3作品『わが友イヴァン・ラブシン』(1984), 『フルスタリョフ, 車を!』(1998), 『神でいるのもたやすくはない』(2013) は、画面上に何が描かれ、どのようなストーリーが展開しているのか、理解することが非常に難しい。これは状況説明が十分になされなかったり、登場人物の内面が描かれなかったり、メインストーリーに直接関与しない副次的モチーフが散りばめられたり、あるいは観客に与えられる情報がそもそも不確かであったり主観的であることによる。これらはドラマトゥルギーとして意図的に行われており、したがって、どの作品も観客に正しい理解というものを求めている。世界は体験することはできるが、理解の対象ではないものとして現れることになる。

本発表では、この一種変わったドラマトゥルギーのあり方を、スターリン体制下のソ連社会を描いた『わが友イヴァン・ラブシン』と『フルスタリョフ, 車を!』において考察し、必要に応じ、ストルガツキー原作のSF映画『神でいるのもたやすくはない』にも言及する。ゲルマンに関するもっとも重要な先行研究のひとつは、ミハイル・ヤンポリスキーの「ディスクールと物語」(1989)であるが、そこにおいて『わが友イヴァン・ラブシン』の特徴は、物語とディスクール(物語の提示法)の分裂として説明されている。本発表では、この観点を発展させ、『わが友イヴァン・ラブシン』のディスクールが、映画の中で直接描かれない物語、メインストーリーの表層に現れない物語を生み出す装置であることを示してみたい。そして『フルスタリョフ, 車を!』において、このドラマトゥルギーがどのように展開し、「分かりにくさ」の質がどのように変化しているか検証する。

さらに、発表ではゲルマンが歴史をどのようなものとして認識し、どのような形で芸術的構造に組み立てたかを考察する。ゲルマンが最後の作品群で一貫して描いたのは、スターリン体制下の恐怖政治であったと言え、このことは重要な問題であると考えられる。何が描かれているのか判別しにくい両作品が提示するのは、世界把握の難しさ、歴史認識の困難さ、両義性である。歴史の物語化は歴史を一義的に対象化することであり、そこでは多義性や固有性は捨象される。ゲルマンはそのような物語化を避けたと考えられ、このことはゲルマン作品の大きな特徴となっていると言える。

(ながい じゅん, 津田塾大学)

【C1-2】アンドレイ・タルコフスキイ監督の作品分析
と『映画解釈学』

扇 千恵

Дмитрий Афанасьевич Сальнский はその著
«Киногерменевтика Тарковского»(『タルコフスキイの映
画解釈学』2011年, モスクワ)で, 自国, 他国における従
来のタルコフスキイ作品分析の現状を踏まえたうえで,
「映画解釈学」という自らの方法を提唱し, その正当性
の根拠を明らかにしようとしている。

著者の構想は, 解釈学による監督作品の解釈ばかりで
はなく, 宇宙の法則に対する自己の理解を一定のシステ
ムに従って映画表現に具現化したと考えられる監督自ら
の解釈学をも明らかにするという試みのうえに立っている。

著者サリンスキイは次のように指摘する。

「タルコフスキイ作品の多義性について今日まで正
確な呈示がなされながら, そこからはそれらを不可知と
する不正確な結論が導き出されたにすぎない。そこで非
合理的なデータを使用する仕事, 余分な意味を持つテキ
ストに通じた解釈学が助けとなる。解釈学を使う解釈の
目的は, コンテキストの相互関係が有するシステム, つま
り, 作品に含まれる全体的な芸術世界の形象を創り出す
ことにある。」

わが国でもタルコフスキイは最も良く知られたロシ
ア人映画監督であり, 彼に関する著作, 翻訳書は多く出
版されている。それらの資料をも踏まえ, 本発表では,
特に作品『ノスタルジア』を具体例として取り上げなが
ら, サリンスキイの「映画解釈学」によって従来の作品
解釈にどのような新しい展望がもたらされたかについて,
比較検討を試みたい。

(おうぎ ちえ, 同志社大学)

【C1-3】幸せな「私」を求めて —アレクセイ・バラバ
ーノフの映画における創作のテーマ

梶山 祐治

昨年急逝した映画監督アレクセイ・バラバーノフの長
編作品14本中(そのうち『列車の到着』(1995)は, 他
3監督と共同のオムニバス形式), 日本でこれまで公開あ
るいはDVDとして発売されたのは, 現在のところまだ5
作品に過ぎない。そのため, その個性的な作風も手伝っ
てカルト作家として紹介されがちなこの映画監督が撮っ
た, 19世紀末のヤクート人の生活を再現した『川』(2002)
や哀切なメロドラマ『痛くない』(2006)といった美しい
作品を, 私たちはまだ目にできないでいる。本国ロシア
においては, 近年のロシア映画に見られる暴力描写を控
える傾向とは無縁に, そのリアルな暴力描写から北野武
やタランティーノと比較されることが多い。時にグロテ
スクとさえ呼べるこうした目立つ暴力的な場面を指して,
ショッキングな調子で否定的に語られることも少なくない
のだが, そうした印象が優先した言説が, 彼の映画が
どういう仕組みで作られているかとう問題に向き合うこ
とは稀である。

本発表では, 目を背けられがちな演出の裏で, 映画作
家バラバーノフがいかに様々な問題と向き合っ
て画面を組み立てていたかを見ていきたい。『目隠し鬼ごっこ』
(2005), 『貨物200便』(2007)などで背景に映りこむ教
会のイメージや, 『川』, 『ボイラーマン』(2010)に登
場する非ロシア人の役割・あるいはそこで毎回強調される
「ロシア人でないこと」にどういった意味があるのだろ
うか。ここで重要なのは, ソ連崩壊の1991年に長編第1
作『幸福な日々』(1991)を撮ったバラバーノフの活動が,
ソ連から新しいロシアへと至る歴史の歩みに重ねて見る
ことができる点だと思われる。彼の作品は同時代だけで
なく, 19世紀末から20世紀初頭を作品の時代に設定す
ることが多かったが, 実際それらの作品で描かれた時代
はバラバーノフが生きていた時代にも通じる価値観の変
動する転換期でもあったことは留意しておきたい。例え
ば, 100年前の時代を描いた『フリークスも人間も』
(1998)においては, 列車とボートという運動する物体
のイメージを巧みに用いて東と西への分裂が表象され,
現代へつながるテーマが提示されている。そして, 『幸福
な日々』から始まり遺作となった『私も幸せが欲しい』
(2012, 原題は«Я тоже хочу»)へと至るまで, 幸福とい
う普遍的なテーマを彼自身は個人的な問題との関係でど
のように処理していったのか, フィルモグラフィーを辿
っていく。

(かじやま ゆうじ, 東京大学院生)

【C2-1】地下鉄言説を超えて —ゲオルギー・ダネリヤ『モスクワを歩く』と『ナースチャ』に見る地下鉄空間

本田 晃子

1935年に最初の区間が開通したモスクワ地下鉄は、五段階にわたる拡張を経て、現在の路線の大枠が形づくられた。とりわけ第二期から第四期（環状線）にかけて建設された駅は、社会主義リアリズムと呼ばれる建築様式に則って設計され、その豪華な内装から「地下の宮殿」と呼ばれた。これらの地下鉄駅には、公共交通のための単なる技術的空間である以上に、社会主義建設や自然の克服、諸民族の団結といったイデオロギー的内容を、その内装＝装飾を通して「物語る」空間であることが求められた。現代ロシアの思想家ミハイル・リュクリンは、地下鉄空間をめぐるこのような規範化された言表を、地下鉄言説（метродискурс）と名付けている。そしてこの地下鉄言説をイメージによって補強したのが、他ならぬ映画という物語のなかの地下鉄空間だった。スターリン期のソヴィエト映画では、地下鉄駅はまさしく地下の宮殿として描かれ、首都モスクワを至高の中心とするソ連邦の空間的ヒエラルキーの形成において重要な役割を果たした。

スターリンの死後も、地下鉄空間は映画の背景として用いられ続けたが、そのなかでもひととき異彩を放っているのが、ゲオルギー・ダネリヤの一連の作品である。ダネリヤの父親がモスクワの地下鉄建設に従事していたこともあり、彼の作品では地下鉄が物語の舞台として、あるいはロケ地として頻りに利用された。それらのうちから、今回の発表では『モスクワを歩く』（1963年）と『ナースチャ』（1993年）の二作品をとりあげる。両作品では、ともにソコリニーチェスカヤ線の大学駅が用いられた。1959年1月12日に開設されたこの大学駅は、環状線の駅に代表されるスターリン期の華々しいスタイルから、イデオロギー的内容を欠いた無装飾のフルシチョフ様式への移行を、まさに体現した建築空間だった。

30年という時を隔てて撮影されたこれら両作品では、大学駅は単なる背景の域を超え、プロットそのものに関わる象徴的な場として機能する。わけても注目すべきは、両映画における地下鉄駅の描写の、地下鉄言説という規範からのずれ、逸脱である。したがって本発表では、リュクリンの議論を参照しつつも、スターリン期に形成された地下鉄言説が、ポスト・スターリン期、そしてソ連崩壊後に撮影されたこれらの映画内においてどのように異化されることになったのかを論じる。

（ほんだ あきこ、北海道大学）

【C2-2】後期ソヴィエトにおける独ソ戦記念碑の表象と機能

前田しほ

後期ソ連では、現代に至るまで、ナショナル・アイデンティティの構築に、「大祖国戦争」つまり第二次大戦時の独ソ戦の記憶が大きな役割を果たしている。映画、テレビ、絵画、記念碑、戦争博物館・戦争記念館、公共建築物のモザイク画・レリーフ、出版物、記念日の式典・パレード等あらゆるシーンで、神話化された戦争が華々しく描かれる。戦前及び戦時下の大衆と政権が決して一体化してはいなかったことを考慮すれば、このプロパガンダは驚嘆すべき効果をあげた。本報告では、戦争記念碑に注目し、表象を分析することによってその機能を明らかにすることを目指す。現在撤去や再建の対象となり、追跡が困難となりつつある戦争記念碑であるが、上から愛国主義を押し付けるというよりも、大衆に理想の国民像を指し示し、内面化せしめることによって、国民化をうながす過程を観察しうる素材として、極めて興味深い。ソヴィエト・ロシアの戦争記念碑は純粋な顕彰碑とも慰霊碑とも言い難い、両方の要素が複雑に融合した空間である。が、あえて傾向を整理すると、例えば、人物像であれば、男性像は兵士を模り、国家の権威を表す顕彰碑である。他方、女性像のほとんどは母親であり、戦死者を悼む慰霊碑である。男性兵士像が国民としての覚悟を理性とイデオロギーを動員して訴えるのに対し、母親像はノスタルジックな感傷に訴えることで社会的共同体としてのコミュニティの結束を強め、愛国主義の喚起に優れた力を発揮する。このように、戦争記念碑においてジェンダーは重要な役割と機能を負っている。基本的にソヴィエト・ロシアの記念碑を分析対象とするが、必要に応じて、旧ソ連、旧・現共産圏の記念碑やソ連崩壊後の新しい記念碑にも言及する。

（まえだ しほ、東北大学）

【C2-3】国家建築様式からの逸脱または跳躍：建築競技設計後におけるソヴィエト宮殿の「アメリカ化」

鈴木 佑也

本報告では1930年代に行われた建築プロジェクト『ソヴィエト宮殿』の建築競技設計終了後から建設作業凍結に至るまでの方向性を、当時のソヴィエト建築界が目指していた「建築遺産の習得」との比較を行い、明らかにする。その中でもアメリカ建築との交流によって独自のスタイルを形成しようとしていた点をとりあげる。

建築プロジェクト『ソヴィエト宮殿』は、その競技設計そのものが多くの先行研究で取り上げられてきた。だが競技設計後の建設段階からその作業が凍結するまではほとんど取り上げられることがなかった。そのため1933年以降のソヴィエト建築界とソヴィエト宮殿の建設段階の関連性は不明瞭であると言わざるを得ない。この頃にソヴィエト建築界で生じた「建築遺産の習得」とは、1930年代半ばのソヴィエト建築界において政治とのつながりをより強め統一的な方向性を確立するために、それに相応しい国家建築様式確立を目指して打ち出されたものである。このはたらきかけによって、一種の古典回帰が生じ、建築スタイルに関する統制が建築界で生じるようになった。

この流れの中で「V. I. レーニンの記念碑としての建築物」であるソヴィエト宮殿もその方針の影響を受けることになる。だがこの記念碑建立を実現するにあたり設計面、特に設備や高さにおいて古典建築遺産の習得のみでは解決できない問題が生じた。この解決策として、当時最新の建設技術を取り入れ独自のスタイルを確立しつつあったアメリカの摩天楼建築がソヴィエト宮殿の建設段階では着目された。当初は設備や構造面に限られていたが、最終案の策定に際し、外見においても少なからずその影響が確認できる。このことは、当時のソヴィエト建築界で生じていた国家建築様式論争とは異なるかたちでソヴィエト宮殿の建設が進められていたことを意味している。また、その建設段階では最新の建設技術(アメリカの摩天楼建築に導入された技術)を国家的な建築物に反映させようとした、「建築遺産の習得」からの脱却を図ろうとするソヴィエト宮殿という建築プロジェクトの特殊性を見出せるのではなかろうか。

(すずき ゆうや, 東京外国語大学院生)

【C2-4】日本ハリストス正教会東京復活大聖堂(ニコライ堂)の旧イコノスタシス研究

宮崎 衣澄

日本ハリストス正教会東京復活大聖堂(ニコライ堂)の旧イコノスタシスは、ロシアの宮廷付イコン画家であるヴァシーリイ・ペシェホーフ(1818-1888)によって制作された。このイコノスタシスは、亜使徒聖ニコライが1880年ロシアに帰国した際に、東京に新たに建築する大聖堂にふさわしいイコノスタシスを作成することができるイコン画家を探し歩き、自ら注文したものである。しかし、残念ながら1923年の関東大震災でこのイコノスタシスは焼失し、現在は写真資料によってのみ、当時の様子を知ることができる。

これまでニコライ堂の旧イコノスタシスがペシェホーフによって制作されたことは、ニコライの日記などにより知られていたが、このイコノスタシスが、ペシェホーフ工房のイコンの中でどのような位置を占めているか、また19世紀末のロシアイコンの中で、ニコライ堂の旧イコノスタシスがどのような特徴を持っているかについては、研究されてこなかった。これは、19-20世紀のロシアイコンが、ロシアにおいて近年まで研究の対象とされてこなかったため、研究が進んでいなかったことに起因する。本発表では、国立国会図書館所蔵の写真資料をもとに、ニコライ堂の旧イコノスタシスの再現を試みる。その上で、現代のペシェホーフ研究家であるJK. ベーリックによる体系的な研究を踏まえ、ニコライ堂の旧イコノスタシスの特徴について考察する。ベーリックは著書の中で、ペシェホーフ工房がニコライ堂の旧イコノスタシスを受注したことを記載しているが、具体的なイコンの図像や特徴については言及していない。従って、東京復活大聖堂の旧イコノスタシスの調査・研究は、ペシェホーフ工房のイコン研究全体にも寄与すると考えられる。

(みやざき いずみ, 富山高等専門学校)

【C3-1】 В.Ф.Одоевский の音楽美学 —19世紀前半のロシアにおける西欧芸術音楽の受容をめぐって

三浦 領哉

19世紀のロシアにおいては、作曲家の作品に対する評論や独立した論文を通じてそれぞれの音楽美学を論じた者たちがあったが、その最初が作家にして音楽批評家であったウラジーミル・オドーエフスキー *Одоевский, Владимир Федорович* (1803-1869) であった。オドーエフスキーは、ロシア国民主義音楽の出発点である1820年代に音楽評論活動を始め、前世紀以来イタリア音楽の強い影響下にあったこの時期のロシアに、文筆を通じてドイツ音楽を盛んに紹介した。現在では西洋音楽史上の金字塔とされる作品を数多く残したバッハ *Johann Sebastian Bach* (1685-1750) やベートーヴェン *Ludwig van Beethoven* (1770-1827) の音楽をロシアに紹介したのも、また1820年代後半から勃興しミハイル・グリンカ *Глинка, Михаил Иванович* (1804-1857) やアレクサンドル・ダルゴムイシスキー *Даргомыжский, Александр Сергеевич* (1813-1869) によって実践された、音楽における国民主義を評論の側面から強力に後押ししたのも、ロシア音楽史上におけるオドーエフスキーの大きな功績である。このようにロシア音楽史の歴史的展開を見る上で、この時代に彼が果たした役割は明白であるにもかかわらず、研究は作家としてのオドーエフスキーを対象としたものに限られている。ロシア音楽における国民主義については、ソ連時代、とりわけグリンカにその功績が帰せられ論じられてきた。そのグリンカについて論じられる際、オドーエフスキーの名はしばしば文献に登場するのに対し、グリンカの国民主義を文筆によって基礎づけたオドーエフスキーについて掘り下げた研究はほとんど存在していない。確かにソ連時代、ツァーリや貴族に対して批判的な内容を含む後期国民主義オペラ、とりわけムソルグスキーやリムスキー＝コルサコフの作品は政治的理由から扱われやすかったのに対し、ツァーリや皇室を礼賛する内容が含まれる前期国民主義オペラについてはほとんど研究が進まなかった。ソ連崩壊後のロシアでは、研究対象として扱える作曲家や音楽批評家の幅は広がったが、音楽研究の規模自体が大きく縮小したこともあり、現在に至るまで「音楽におけるイデオログ」としてのオドーエフスキーについての研究はなされていない。そこで本発表では、彼の音楽評論および論文を手がかりとしながら、ロシア国民主義音楽の礎を文筆において築いたオドーエフスキーがどのような美学に基づいてどのようにロシアに西欧の音楽を紹介し、また来たるべきロシア国民主義音楽にどのようなイメージを抱いていたのかを明らかにする。

(みうら れいや、早稲田大学院生)

【C3-2】 メイエルホリド演劇における音楽性と研究工房

伊藤 愉

メイエルホリドの演劇活動における音楽性の概念を考察する。メイエルホリドの言説に頻繁に現れる「音楽性」という言葉は、これまでのメイエルホリド研究でたびたび言及されてきたにも関わらず、その実体は明らかになっていない。メイエルホリドの音楽性を理解するためには、それを単なる概念としてではなく、より具体的・技術的な「手法」として捉える視点が重要と言える。

1920年代後半から、メイエルホリドは *партитура* という用語を用いている。これは、演劇を音楽的に考察、構築するメイエルホリドの立場を象徴するキーワードと言える。元来スコアとは音符や楽曲のテンポが記された演奏者のための道標である。スコアを読む際に重要なのは、横のライン(個々の楽器の流れ)と同時に縦のライン(全体の組み合わせ)だろう。メイエルホリドは革命後に、芝居のエピソード化という手法を頻繁に用いる。これは、一つながりの戯曲を分割して、短いまとまりの連続に仕上げる手法だった。このエピソードは全体のスコアを分割した、小節の連なりと看做しうる。このように、メイエルホリドの音楽性はそれまでの具体的手法にも接続しうるものだが、依然不明な点が多い。

こうした問題を論じるにあたって、手がかりとなるのが、1930年代にメイエルホリド劇場の附属機関として活動していた研究工房 (*Научно-исследовательская лаборатория*) である。この工房には、日本人演出家佐野碩も所属しており、その佐野と後にマールイ劇場の演出家となる *И. Вальпхофский* は、観客の反応調査の試みに携わるとともに、芝居のスコア作成に従事していた。その成果として、*Вальпхофский* の論文「音楽の演劇性と演劇の音楽性について」(*И. Вальпхофский 『観察. 分析. 経験』*) や、*Вальпхофский* の講演記録「俳優の発話と動作の記録」を読むことができる。こうした記録を通して、メイエルホリドがどのように「音楽性」を芝居のなかで「機能」させようとしていたかを考察したい。

(いとう まさる、一橋大学院生)

【C3-3】 レールモントフ『仮面舞踏会』における女性
表象と映像化・舞台化の問題

榎岡 求美

1835年に韻文で書かれたレールモントフの戯曲『仮面舞踏会』は、ペテルブルグのエンゲリガルド邸で開かれていた仮面舞踏会を舞台に社交界への厳しい批判を伴った内容であったため、検閲に通らず、途中で『アルペーニン』と改題するほどの大幅な書き直しを含め、繰り返し改訂を余儀なくされたが、全体が上映されたのは作者の死後30年もたってであった。3幕を4幕にし、現在では作品のキー・パーソンとされる「謎の男」という登場人物も検閲のために登場した。現在では初版の原稿が残されていないため、「見知らぬ男」の登場する4幕ものが基本とされている。1917年にロシア帝政最後の作品として上演されたメイエルホリド演出では、「謎の男」にヴェネチア風の仮面をかぶらせ、『ドン・ジュアン』で最後に主人公を奈落の底に引きずりこむ石像＝地獄の使者を想起させる卓越した演出で成功したことも、戯曲テキストのオリジナル論争をおさえ、4幕物が決定版として流布することにもなった要因と思われる。メイエルホリドの演出は、革命前夜にもかかわらず、観客を圧倒する豪華な舞台装置、各幕ごとに重苦しく下りて、最後にはアルペーニンを押しつぶし、「謎の男」ともども社交界の怨念を具現化する緞帳など、アルペーニンという個人の尊厳がロシア社会の姦計や腐敗に破滅させられる男の物語の部分に焦点が当てられている。

しかし、『仮面舞踏会』は社交界のなかで、個人としての居場所を見出そうとする女たちの物語でもある。劇中のニーナの機能は、純愛に目覚めさせることによって社交界の自墮落的な生活からアルペーニンを救済しながら、アルペーニンのための餌の餌として利用される純粋で弱い女性という、人格を持たない理想化されたステレオタイプというだけではない。近年の研究では、ニーナについても、自らの死を「知りつつ」、一方的に疑惑をもったアルペーニンに対し、許しを与えない毅然とした個人として抵抗する強さが指摘されるなど、女性登場人物が注目されるようになってきている。

本報告では、現在の決定稿とされる4幕ものにおける女性表象について分析し、それがメイエルホリドの演出およびセルゲイ・ゲラシモフ監督による映画化作品においてどのように扱われているのか、検討を行う。

(たておか くみ, 神戸大学)

【C3-4】 Лермонтов в «интеллектуальном обиходе»
русских мыслителей (к 200-летию со дня рождения)

ЖДАНОВ Владимир, 鈴木 淳一

Размышления Пастернака о роли Лермонтова в «интеллектуальном обиходе» нашего времени, стали отправной точкой нашего исследования. При этом мы конкретизировали это понятие, имея в виду не столько художественные новации Лермонтова, ставшие достоянием русской литературы, сколько отношение к Лермонтову русских мыслителей: В.Г.Белинского, Ю.И.Айхенвальда, Н.А.Бердяева, В.В.Розанова и А.Ф.Лосева, оказавшее в той или иной степени влияние на оценку Лермонтова в русском обществе разных периодов. Белинский, рассматривающий поэзию, как «квинтэссенцию жизни» и полагающий, что проявление таланта поэта связано с историческим развитием общества, преимущественно рассматривал Лермонтова как национального поэта, выразившего в своём творчестве исторический момент развития русского общества. Социально-исторический подход Белинского, ставший во многом доминирующим для освещения Лермонтова в русском обществе в XIX и XX вв., трансформировался в 20-50 годы в миф о Лермонтове-тираноборце, созданный советской вульгарно-социологической школой.

Философско-импрессионистический подход антагониста Белинского, популярного в начале XX века критика Ю.Айхенвальда, открыл диалектику души Лермонтова, в которой демонизм и красота зла преодолевались на пути к духовной тишине и Богу.

Эта идея Айхенвальда получила своё развитие в оценках Лермонтова философами Серебряного века. В.В.Розанову представлялось, что Лермонтов «начал выводить священную книгу России» и мог пойти по пути Серафима Саровского. Н.А. Бердяев полагал, что Лермонтов, несмотря на богоборчество, «был самым религиозным поэтом России». А.А.Лосев обратил внимание на мелькающий в стихах Лермонтова «золотисто-зеленый» аспект Божественной Софии и считал поэта духовным предшественником Достоевского.

Современное российское гуманитарное сознание в освещении Лермонтова уже исходит не от Белинского, как в советский период, а от мыслителей Серебряного века и Соловьёва, увидевшего в Лермонтове ницшеанского пророка.

(ジダーノフ ヴラヂーミル, すずき じゅんいち,
札幌大学)

【C4-1】スキタイ主義に見られる「スチヒーヤ」の象徴について

佐藤 貴之

スキタイ主義 *скифство* は1917年にペトログラードで興った文芸活動である。スキタイ主義を主導したのは評論家のR.V.イワノフ＝ラズムニクだが、その活動の中心には「銀の時代」を代表する芸術家たちが名を連ねていた。ロシア文学史において「スキタイ人」*скиф* は、旧世界に終焉を告げる破壊者の表象としてしばしば登場してきた。中でもA.A.ブロークが残した革命後の作品(『十二』、『スキタイ人』)はスキタイ主義の金字塔となり、初期ソビエト文学の形成に決定的な影響を与えた。

スキタイ主義者らは『西欧の没落』(O.シュペングラー)に先立つ形で西欧中心主義を否定、ナロードに根ざしたロシア文化発展の道を模索していた。同様にスキタイ主義者らは教会権力を否定し、ロシア正教の遺産に対して懐疑的姿勢を示していた。また、彼らはロシア文化に異質なるものとしてマルクス主義の階級闘争、ならびにプロレタリア文化論をも否定した。このようにスキタイ主義者らは、当時の錯雑した文化的状況下において独自のロシア文化論構築を目指していた。

イワノフ＝ラズムニクが主導したスキタイ主義は革命後の混乱、および内部分裂の結果、解体を余儀なくされた。しかし、革命後の文壇で頭角を現した同伴者作家のB.A.ピリニャークはスキタイ主義の後継者として注目を集めた。

ピリニャークはスキタイ主義の基本理念を継承し、ナロードに根ざしたロシア文化の重要な要素として「スチヒーヤ」に着目した。ピリニャークが革命後に執筆した作品の多くは、ナロードのスチヒーヤを探求する過程で誕生したものといえる(『裸の年』、『機械と狼』、『日本印象記』等)。そしてピリニャークが自らの文化論を構築してゆく過程において模範としたインテリゲンチヤこそブロークであった。

ピリニャークはA.ベールイ、A.M.レーミゾフ、E.I.ザミャーチンに代表されるモダニズム文学の追従者と定義されることがもっぱらである。しかし、その文化論において影響を与えたのは詩人のブロークに他ならない。従って本報告では、ブロークとピリニャークの文化論に焦点を当て、十月革命後の文壇に開花したスキタイ主義に見られる「スチヒーヤ」の象徴について考察を加える。

(さとう たかゆき、東京外国語大学院生)

【C4-2】レーニンなき共産主義へ

北井聡子

本研究は、1921年～23年のコロンタイの共産主義思想をレーニンとの決別を起点として明らかにする試みである。1921年に開催された第十回党大会は、革命政府にとってまさに転換点であり、ここからNEPが開始され、また直前のクロンシュタットの叛乱を受け「不安感が大会にみなぎっていた」(E.H.カー)とされる。この不安感に一層拍車をかけたのは、コロンタイを中心とする「労働者反対派 *Рабочая оппозиция*」という分派の存在であった。反対派は主に党の官僚化を批判し、労働組合の自治を要求したが、彼らの主張はかなりの支持を集め、今や党の中央を脅かすほどの勢力となっていた。とりわけ大会前夜、党員たちにばら撒かれたコロンタイの小冊子「労働者反対派」は、大きな議論を巻き起こし、ソ連時代長らく閲覧が制限される問題作となった。この著作においてまず目を引く夥しい数の誤字・脱字や、声高に繰り返される「粛清の必要性」は、党が陥っている危機的状況を目の当たりにしたコロンタイの焦燥感を伝えるものであり、故にここに記された彼女の思想は、かつてない程の純度の高い理想となっているといえるだろう。それは労働組合の自治というよりも、「集団的身体」の形成、つまり労働者全員があたかも巨大な一人の人間となり、一つの共通の意思を持って行動する状態への希求である。反対派は、第十回党大会でレーニンから徹底的な批判を受け敗北し、その後コロンタイは自らの過ちと、レーニンの正しさを認識したとされている(A. Иткина)。しかし実際は「自らの過ち」を認めた形跡はなく、その後もレーニンら主流派への批判を展開している。

一方、この騒動の直後にコロンタイは小説『偉大なる恋』を執筆している。革命家のヒロイン・ナターシャと妻子ある男性セーニャとの不倫の恋物語である本作は、結末にヒロインが恋人からの呪縛を断ち切る場面以外は際立った展開はなく、全編に渡って恋人から軟禁されるヒロインの焦燥感と、女性達を恐れるセーニャの不安が延々と描かれるのみである。よってこの作品はこれまで殆ど注目されてこなかったが、本研究ではセーニャのモデルがレーニンであるとの指摘(C. Porter)に着目し、レーニンとの決別の書としてこの物語を読み直したい。つまりこれは権威(レーニン)に対する女(*Рабочая оппозиция*)の戦いの物語であり、コロンタイが描く共産主義世界は「レーニンを排する」ことによって、はじめて達成されるものとなる。

(きたい さとこ、東京大学院生)

【C4-3】東部戦線とユダヤ人 —S・アンスキー『ガリツィアの破壊』(1920年)に描かれたロシア・ユダヤ関係の両義性

赤尾 光春

しばしば「忘れられた戦線」と呼ばれてきた第一次世界大戦の東部戦線では、ロシア軍が占領したポーランドやガリツィアにおいてユダヤ人に対する組織的なポグロムが発生し、大量のユダヤ人が殺戮と追放の憂き目に遭った。第一次大戦中にユダヤ人が被った被害は規模においてロシア国内戦のそれに匹敵するとも言われるが、帝政時代や国内戦のポグロムの研究と比べてほとんど語られてこなかったトピックである。この忘れられたポグロムについてはしかし、ロシア語およびイディッシュ語による作家、民俗学者、政治活動家という三つの顔をもつS・アンスキー(1863-1920)が『ガリツィア、ポーランドおよびブコヴィナにおけるユダヤ人の破壊』(1920年、通称『ガリツィアの破壊』)に克明な記録を書き残している。

本発表では、戦時下で甚大な被害を被ったユダヤ人社会の救済のためにロシア軍とともに東部戦線に赴いたアンスキーが同書に書き記した記述を軸に、東部戦線におけるロシア軍の占領下でユダヤ人、ロシア人、ドイツ人、オーストリア人、ポーランド人、ウクライナ人等の間で生じた民族関係の諸相とくに光を当てる。その際、ロシアの軍関係者や政府関係者とアンスキーの間に見られたアンビバレントな関係にも目配せしながら、アンスキーが見聞したガリツィア地域のユダヤ人のあいだで、諸民族との関係がいかに経験されたのか、そしてそれがいかに記述されたのかを検討する。アンスキーの描いた『ガリツィアの破壊』で注目されるのはユダヤ人とロシア人の両義的な関係であるが、そうした記述にナロードニキとしてロシア文化を理想化するきらいのあったアンスキーの思想的立場がある程度反映されていることが推察される。アンスキーの辿った人生行程における明らかなロシア志向の痕跡に目配せしつつ、戦場におけるユダヤ人虐殺の実態を間近で見聞したアンスキーの複雑な心理状況を浮かび上がらせることを通じて、I・バーベリやV・グロスマンといった前線に赴いたロシア系ユダヤ人作家の先駆者としての再評価の可能性についても同時に検討してみたい。

(あかお みつはる, 大阪大学)

【C5-1】バレエ《魔法の鏡》と1900年代ロシア帝室劇場における変化

平野 恵美子

100年以上も前にロシア帝室劇場でマリウス・プティパが振付けたバレエは、現在も人気が高く、プティパが今日のクラシック・バレエを確立した偉大な振付家の1人であることは間違いない。だが、プティパの手がけた作品の全てが今日まで残っているわけではない。本発表で取り上げる《魔法の鏡》もその一つである。《魔法の鏡》は、30年以上の長きに渡り、ロシア帝室劇場のバレエ・マスターとして君臨したプティパの記念公演のために、鳴り物入りで上演された作品だが、「大失敗」に終わり、プティパの事実上の引退を決定づけたとされる。当時、プティパは80歳を過ぎており、世代交代の時が来ていたのだと言って片付けるのは簡単である。《魔法の鏡》は「失敗作」としてこれまであまり注意を払われて来なかったし、作品自体も失われてしまった。だが20世紀以降のバレエにもその重要性を失わないプティパの引退を決定づけたこの作品に注目し、帝室劇場における変化の実態と、ひいては後のバレエ・リュス登場への道筋を探ることは無意味ではないと考える。

一世紀以上前のバレエ作品の具体的な演出や振付を正確に知るの是非常に困難である。だが本発表の目的は、《魔法の鏡》という作品の演出・振付の実態を明らかにすることではなく、この作品の「失敗」が、1900年代のロシア帝室劇場とバレエ史においてどのような意味を持つのかを、関係者の証言、批評、楽譜等を基本的な資料として用い、考察することにある。バレエは異なるジャンルの芸術から成る総合芸術である。そこで舞踊の他に、プーシキン原作の民話詩、アレクサンドル・ゴロヴィーノフの美術、アルセニー・コレシチェンコの音楽にも着目し、バレエ史およびロシア文化史における《魔法の鏡》の上演意義を探る。

(ひらの えみこ, 上智大学)

【C5-2】日本人によるソ連バレエ受容初期の動き —ソ連文化省資料をもとに

斎藤 慶子

1953年以降ソ連が積極的に展開していった文化交流の流れの中で日本の多くの観客もまたソ連バレエとの出会いを果たした。まず輸入されたバレエ映画が人々の関心を惹きつけ、1957年のボリショイ劇場バレエ団初来日公演は日本のバレエ界に特に大きな影響を与えた。ソ連バレエに学びたいという切望が日本人の間に生まれ、それは1960年のチャイコフスキー記念東京バレエ学校の設立にひとつの形として結実される。しかしそれよりも前に、バレエ団来日の57年をも待たずしてソ連バレエにコンタクトを試み、その成果を日本にもたらした人々がいた。貝谷八百子と松山樹子の両名である。ソ連文科省を通じて楽譜や写真資料などの提供を受け、貝谷八百子は『白鳥の湖』(スタニスラフスキー&ネミロヴィチ=ダンチェンコ・モスクワ音楽劇場版)(1954年)、『ロミオとジュリエット』(1956年)、松山樹子は『バフチサライの泉』(1957年)などを日本初演した。彼女たちはそれぞれに訪ソ、現地のバレエ劇場で観劇するのみでなく実際に現地のバレエ団員に混じってレッスンを受講もしていた。ソ連文科省資料には彼女たちの旅程が記録として残されている。その旅の記録とその後日本で行った初演時の記録を照らし合わせながらソ連から得たものの検証を試みるのが本発表の目的である。

(さいとう けいこ, 早稲田大学院生)

【C5-3】M・プティパからM・フォーキンのバレエの変貌, そのバレエ史上の意義 —作品構造, 使用空間, 技術的側面の分析を中心に—

村山 久美子

20世紀初頭、巨匠マリウス・プティパの次世代の振付家としてペテルブルグで創作を開始し、その後まもなく、ディアギレフ率いるバレエ・リュスの最初の振付家として欧米で活躍したミハイル・フォーキンは、振付家として父世代にあたるあまりに偉大なプティパを越えようと、プティパの創作の様々な面を否定しながら、新たな試みを行っているように思われる。プティパとフォーキンの創作を比較分析してみると、フォーキンは、プティパの創作法と対照的な創作の試みや、様々な面でプティパが気付いていなかったバレエ創作の隙を埋める試みを行っている。

フォーキンの創作の新しさについては、ドラマとしてストーリーをダンスで「語る」バレエ(ホレオドラマ)の始まりであることや、ダンスと同等に美術、音楽も重視する総合芸術としてのバレエの始まりなどに焦点が当てられることが多く、作品の構造や使用空間、そしてダンスの動きそのものについての分析は詳細には行われていない。それは、フォーキンの創作が充実したバレエ・リュス時代の作品の復元が行われたのが近年であるためである。

本発表では、報告者の実技の長い経験をも生かしながらフォーキンとプティパの作品のダンス自体を中心に分析を行い、プティパからフォーキンへのバレエへの変貌が、20世紀以降のバレエ史のなかでどのような意味をもつかを明らかにしたい。

(むらやま くみこ, 早稲田大学)

【W】 ワークショップ Новая фаза в толстоведении

Ведущий и комментатор: КИМУРА Такаси (Киотский университет)

Для читателей, критиков и филологов XX века самым большим писателем в русской литературе был Достоевский. В прошлом веке именно Достоевский имел глубочайшее влияние на литературные круги во всем мире, Толстого же воспринимали в качестве великого писателя, но его авторитет был не столь велик. В этом отношении Япония не была исключением: после волны популярности и обожания Толстого с конца периода Мэйдзи до середины периода Тайсё большинство молодежи и интеллигенции постоянно обращалось именно к Достоевскому. Составляя контраст тому, как Бахтин в Достоевском нашел писателя «диалога», Толстой считался писателем, который в художественных произведениях управляет героями по своим законам с трансцендентной авторской позиции, а в статьях односторонне настаивает на своем мировоззрении и требует от читателей строгую мораль и нормы поведения.

Нельзя забывать, однако, что в действительности Толстой даже в разгар «толстовства» повторно подвергался резкой критике и постоянно находился в диспуте. Также он, несмотря на свой консервативный взгляд на искусство, чутко отзывался на новейшие средства информации: фотографию, кино, журналистику. Напомним строку в воспоминаниях Горького о Толстом: «помимо всего, о чем он говорит, есть много такого, о чем он всегда молчит». Нам следует бросить новый свет на то, «о чем он молчит» именно сегодня, когда господствующим становится стремление рассматривать текст не столько в изолированном виде, сколько в связи с контекстом того времени и также с окружающей его средой.

В качестве подобных попыток будут представлены следующие 3 доклада.

1. МОТИДЗУКИ Тэцуо (Хоккайдский университет):

Из истории азиатского восприятия толстовства на фоне Русско-японской войны: случай с Ганди

Хотя учение Толстого о непротавлении злу насилием вызывало амбивалентные отклики везде, только в Южной Африке и позже в Индии, под лидерством М.К. Ганди, оно легло в основу освободительной борьбы народов. Докладчик хотел бы пролить свет на то, как Ганди конкретно воспринимал учение Толстого и положил его в основу своей теории ненасильственного сопротивления. Особенно яркий след в восприятии идеи Толстого индийским адвокатом оставили события 1905 г.: Русско-японская война и Первая русская революция.

2. Александр АЛЕКСАНДРОВ (Институт русской литературы (Пушкинский Дом) РАН):

Репрезентация Толстого в медиа пространстве начала XX века: от героизации к китчу

В докладе анализируются формы репрезентации Толстого в масс-медиа пространстве начала XX века. Анализируются факты публикации художественных портретов писателя и восприятия их как общественностью, так и самим писателем (портреты Крамского, Репина). В работе выявляются механизмы героизации писателя посредством публикации и тиражирования изображений писателя. Анализируются публикации фотографии Ясной Поляны и ее обитателей и роль подобных публикаций в процессе героизации писателя и также в тенденции к китчу (карикатуры, пародии, массовые поделки и пр.).

3. НАКАМУРА Тадаси (Ямагатский университет):

Критика Бахтина на «Войну и мир»: из записей Миркиной

Известно, что Бахтин в своих работах многократно критиковал Толстого: писатель для него всегда был потенциальным конкурентом. В этом отношении стоит обратить внимание на записи Р. Миркиной, отражающие содержание лекций о русской литературе, которые Бахтин лично читал в первой половине 1920-х годов: в записях наибольшую долю занимают замечания о Толстом. В докладе через анализ замечаний о «Войне и мире» исследуется причина того, почему Бахтин настойчиво обращался к Толстому.

【Q】<コロキウム — 報告と討論> 全国6言語アンケート調査結果（最終報告）とロシア語教育の方向性

1. 全体の趣旨

本企画の目的は、2012年度に行ったドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語、韓国・朝鮮語、ロシア語の学習者及び担当教員に対するアンケート調査の概要とその調査結果を報告することにある。理論的枠組みに立脚した分析により、教育・学習環境といった要因が学習者の動機づけにどう影響しているのかが明らかになってきたが、ロシア語は、他の言語と共通項を有する一方で、動機付けの高さの点では特異な振る舞いを見せている。

本報告ではロシア語の分析結果を軸に他言語との比較を試みながら、これまであまり触れられてこなかったロシア語学習者の動機付けに関わる要因を洗い出していく。この結果を元に、ロシア語教育の現状、改善点、今後の方向性について検討する。

2. 各発表者の氏名

報告1. 佐山豪太（東京外国語大学大学院博士課程）
САЯМА Гота

報告2. 宮本友介（大阪大学大学院 人間科学研究科）
МИЯМОТО Юсуке

報告3. 横井幸子（大阪大学大学院 言語文化研究科）
ЁКОИ Сачико

報告4. 林田理恵（大阪大学大学院 言語文化研究科）
ХАЯСИДА Риэ

3. 発表タイトルと趣旨

報告1. 「学習環境と心理的欲求の関係性」の観点から見たロシア語学習者の動機付け

本報告では、学習者と教員アンケートの分析結果を元に、学習環境と心理的欲求の関係性を紹介する。理論的な背景として、データの分析には自己決定理論を適用した。自己決定理論では、有能性、自律性、関係性といった心理的欲求が満たされる際、学習者は最も内的に動機づけられ、より達成感が得られるとされる。

学習者アンケートで心理的欲求の数値は得られている。これを教員アンケート（授業内容、授業目的など）と照らし合わせ、結果の解釈を試みた。ここでは、学習環境と心理的欲求の関係性を介して、学習者の動機付けの諸相を報告する。

報告2. 「自律学習能力」とロシア語学習者

自律学習能力は、動機付けの程度と質に影響を与える。実際、ロシア語学習者に関して、この能力は動機付けとおおむね比例の関係にあった。外国語を習得するには授業だけでは不十分であり、自律学習能力の向上が望まれ

る。ここでは自己決定理論と期待価値理論に立脚し、他言語との比較や教員アンケートの記述を切り口として、動機付けと自律学習能力の関係性を報告する。

報告3. ロシア語学習者の内発的動機付けの高さに関する考察（質的分析の観点から）

ロシア語学習者の内発的動機付けは、6言語の中で最も高い値を示しているだけでなく、量的な分析からは推しはかれない、特異な振る舞いを見せている。アンケート結果から、ロシア語学習者は、「学習に関して内発的動機づけ（興味）と内発的価値（興味・楽しさ）の値が高いにもかかわらず、成功可能性（期待）に対し悲観的で実用価値も見出しにくく、コスト（学習困難）を強く感じる」といった相反する特徴を有していることがわかった。

また、動機付けの特に高いクラスには授業の形態や目的といった項目に共通点がなく、何がロシア語学習者の動機付けを強化しているのかに興味を湧く。ここには、5件法のアンケートの数値からは見えてこない、動機付けの高さの背景が存在すると推測される。そこで、統計的手法（主成分分析）によって上述の振る舞いが顕著なクラスを選定し、さらにクラス規模、学部系統などを加味して対象を絞り込んだうえで、半構造化インタビューを当該教員に対して実施し、ロシア語学習者の示す内発的動機の多様な様を質的に検討する

報告4. 6言語アンケートの総括

報告1と2の分析結果によって明らかにされる、ロシア語学習者のもつ動機付けの程度と質、学習環境と心理的充足度、自律学習能力の諸相、さらに報告3での、動機づけの特に高い学習者群に対する質的分析結果をふまえ、学習環境、授業設計、自律的学習といった諸側面について、昨年度にひき続き、ロシア語教育の現状と課題、今後の方向性等の議論をさらに深めていきたい。また、ロシア語単体の調査の枠を超えた他言語との比較により、6言語の共通点と相違点も浮き彫りにする。

以上の研究報告要旨は著者に無断で引用できない。

Not for quotation without the author's agreement.